




第 1 章



柏市の概要

第1章 柏市の概要

1-1. 自然的・地理的環境

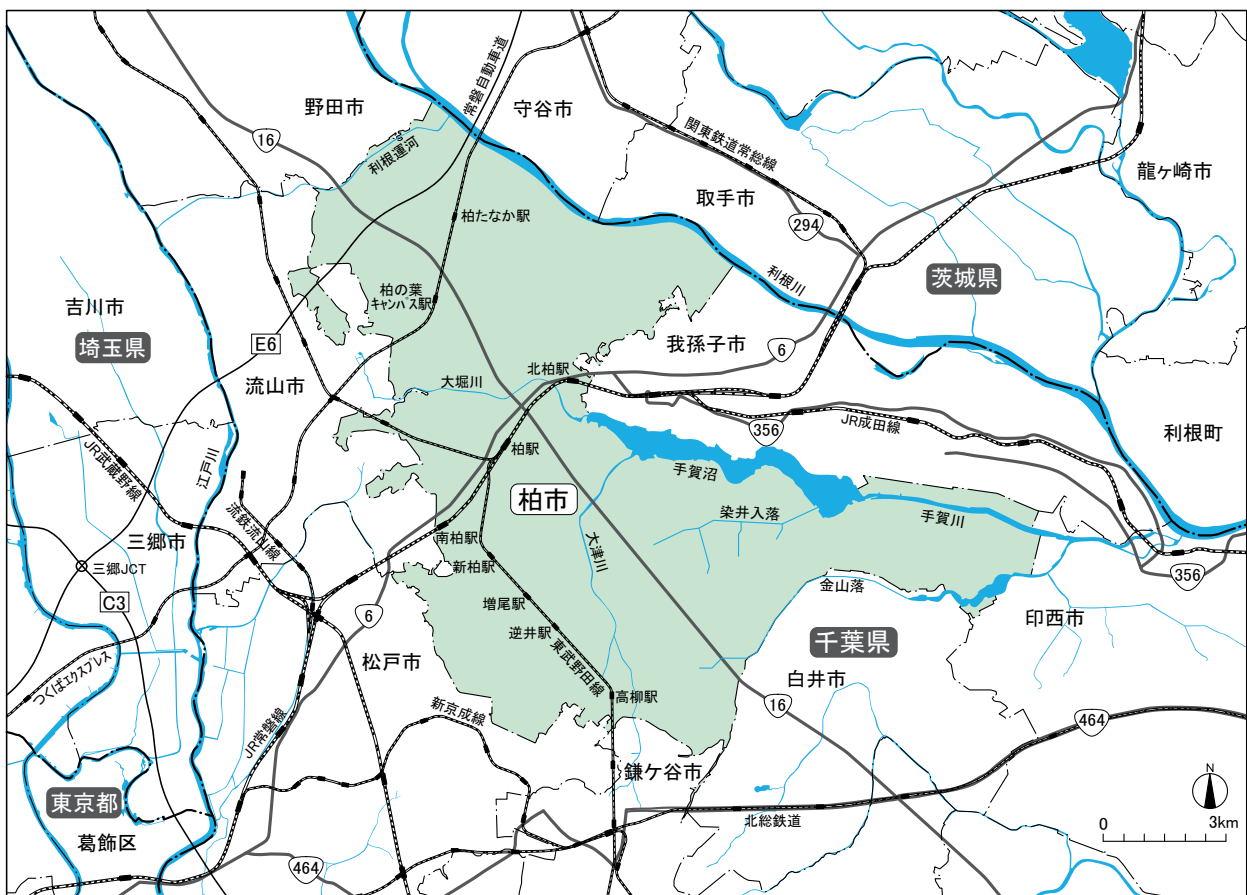
(1) 位置

柏市は、千葉県の北西部の東葛地域に位置し、地理的には首都圏東部の中心的地域となっている。市域の大きさは東西約18 km、南北約15 km、周囲約92 kmであり、面積は約114.74 km²である。東は我孫子市、印西市、西は流山市、南には松戸市、鎌ヶ谷市、白井市、北には野田市があり、さらに利根川をはさんで茨城県取手市、守谷市に接している。

鉄道は都心から放射状に常磐線及びつくばエクスプレスが、南北には東武アーバンパークラインが通っている。道路は東京・茨城方面への国道6号や常磐自動車道、埼玉・千葉方面への国道16号が通っており、首都圏の放射・環状両方向の交通幹線の交差点部に位置する交通の要衝となっている。



図 1-1：千葉県の位置



国土地理院地図 (<https://maps.gsi.go.jp/>) を加工し作成

図 1-2：柏市の位置

(2) 本書における地域区分と呼称

現在の集落景観の原形は、少なくとも市域が「相馬御厨^{そうまのみくりや}」であった中世後期には形作られたと考えられる。古い集落は後世に引き継がれ、また未開の地にも新たな集落が作られ、江戸時代には48の村となった。この時の村名と地域区分は大字名、大字界として概ね今も残っている。

その後、明治・大正の合併により1町5村となった行政界と、現在の大字界を重ね合わせたものが下図である。本書での地域区分と呼称は、この1町5村（田中地区、富勢地区、柏地区、土地地区、風早地区、手賀地区）を大単位とし、小単位を示す場合は現大字の地域区分と呼称を使用することとする。

また、文化財の保存・活用に関する地域区分単位の方針を考える際は、現在の都市計画における地域区分毎の方針と矛盾が生じないように整合を図ることとする。

※大治5年（1130）に平常重が領地の相馬郡布施郷を伊勢神宮に寄付した荘園。現在の我孫子市、茨城県取手市を中心としたあたりである。

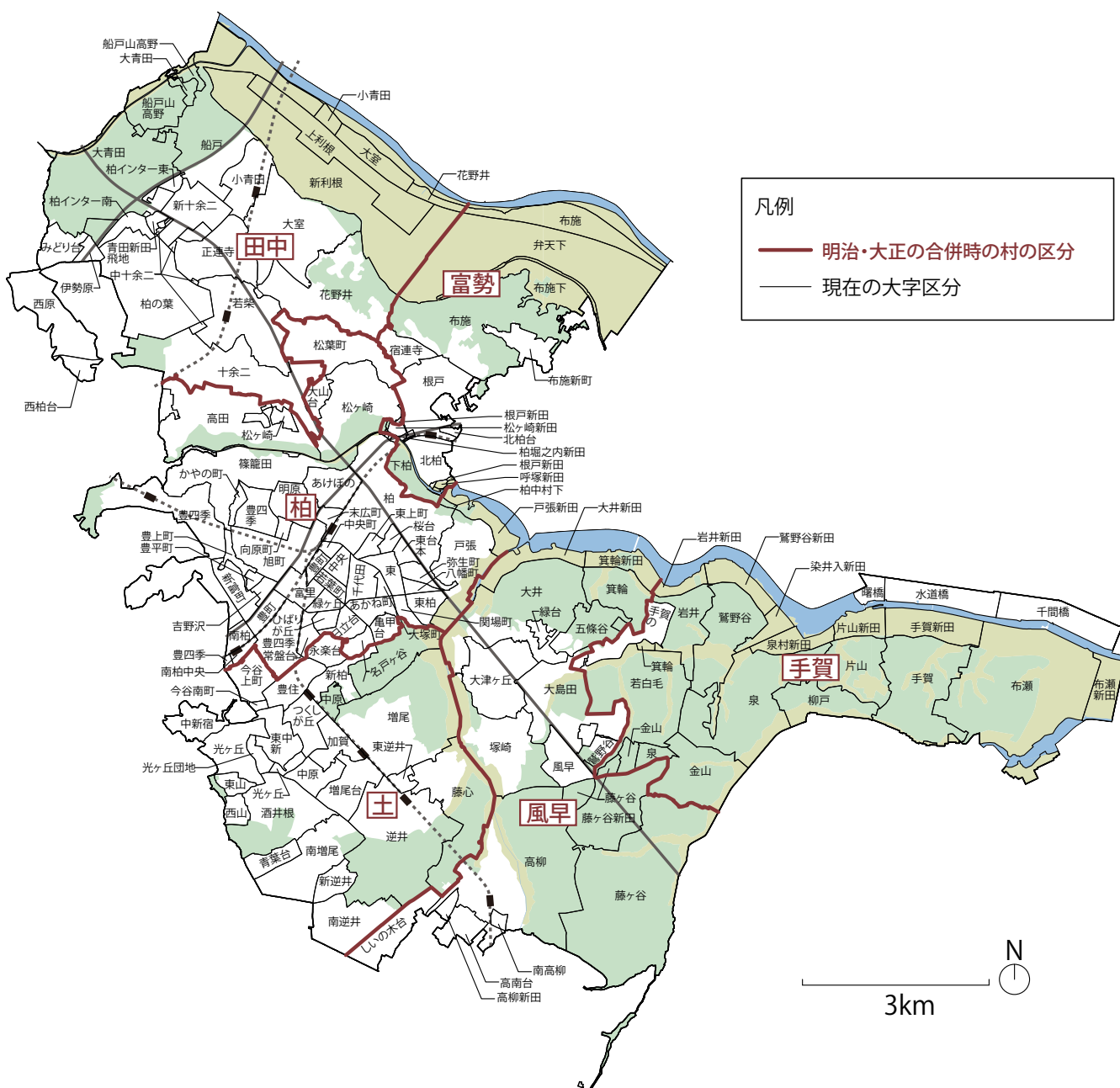
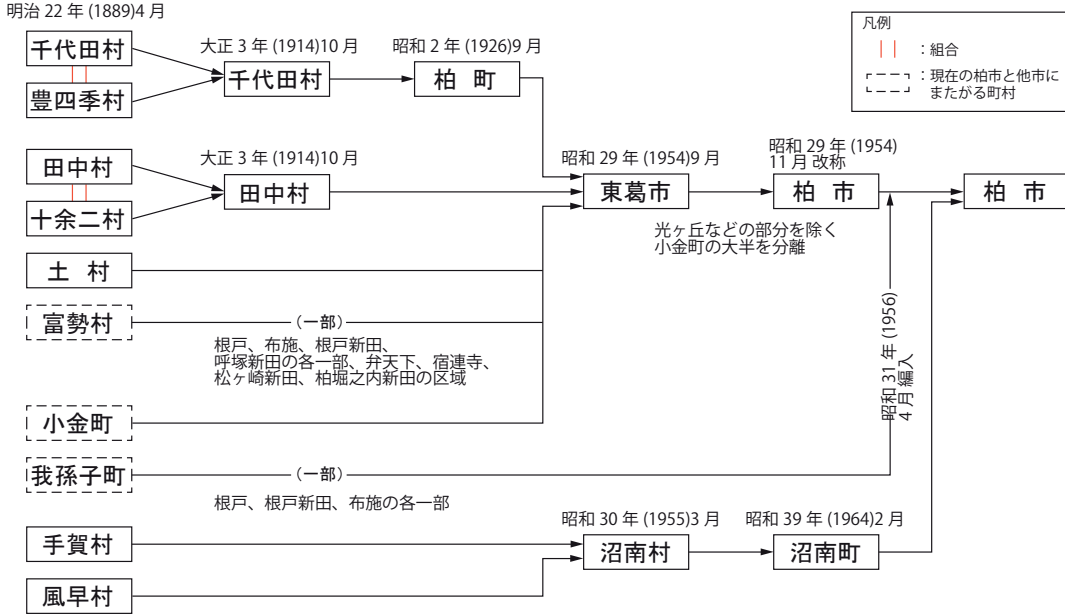


図 1-3：柏市の大字区分

明治以降の合併



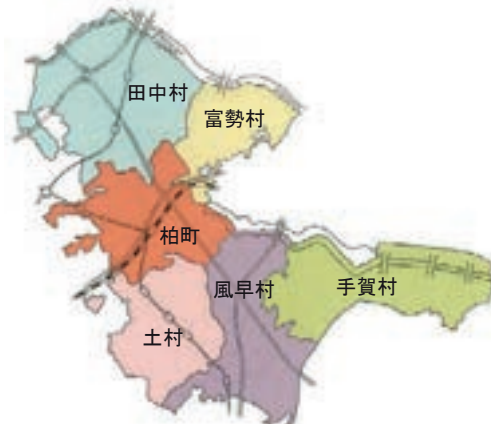
江戸時代初期の村

柏市郷土資料館資料による「郷土かしわ」より転載



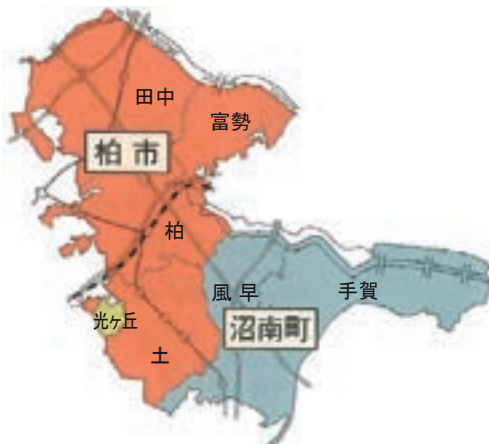
近現代の合併

「明日話せる柏学」より一部加工し転載



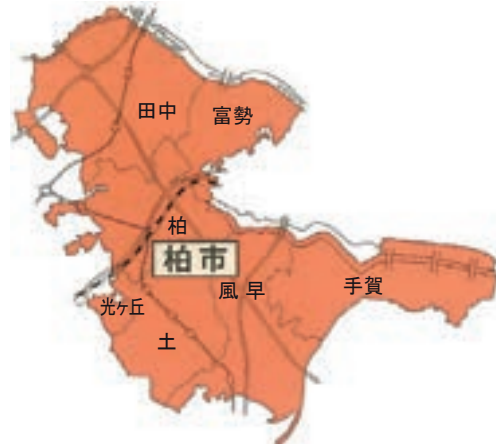
明治・大正の合併

明治 22(1889) 年 4 月～大正 15(1926) 年 9 月



昭和の合併

昭和 29(1954) 年～昭和 39(1955) 年 3 月



平成の合併

平成 17(2005) 年 3 月

図 1-4：合併の変遷

(3) 地形・地質

千葉県地形

柏市の所在する千葉県は、南部は東と南を太平洋、西は東京湾と三方を海に囲まれた房総半島となっており、平野と丘陵が県土の大半を占め、海拔 500 m 以上の山地がない日本で唯一の都道府県である。隣接する都県とは利根川、江戸川、東京湾、太平洋によって画かれているため、古くは外敵の進入を防ぐ役割を持つ一方で、水上交通の要衝としても発展してきた。

柏市の地形・地質

千葉県北西部に位置する本市は、利根川や手賀沼及びこれに注ぐ小河川の周囲に広がる低地と、主に富士山などの火山灰土からなる下総台地で構成される。標高は高い所でも市域南部の下総台地上で約 32 m、最も低いところは手賀沼周辺で約 5 m と起伏が少なく、ほぼ平坦な地形である。

河川は、長さ日本 2 位、流域面積日本 1 位の河川である利根川、手賀沼に注ぐ大堀川、大津川、染井入落、金山落、さらに江戸川の支流である坂川の 7 河川がある。千葉県を代表する天然の湖沼である手賀沼は、印旛沼とともに「県立印旛手賀自然公園」に指定されている。

下総台地は、これらの河川に注ぐ小河川の流れにより浸蝕・開析されて樹枝状の谷津を形成しており、周辺地域の地形上の大きな特徴となっている。河川や湖沼の周辺に広がる低地には沖積低地が形成されており、まとまった農地となっている。市域における地形の構成比は約 7 割が台地、約 3 割が沖積低地である。

丘陵が無いので遮るものがない大きな空が一面に広がり、北の遠方には筑波山、西には富士山がそびえ立つ。低平で広大な台地、台地斜面を覆う斜面林、手賀沼や利根川などの河川周辺に広がる低地に営まれる水田、これらが地形や景観上の市域の特徴となっており、本市の歴史に大きな影響を及ぼしている。

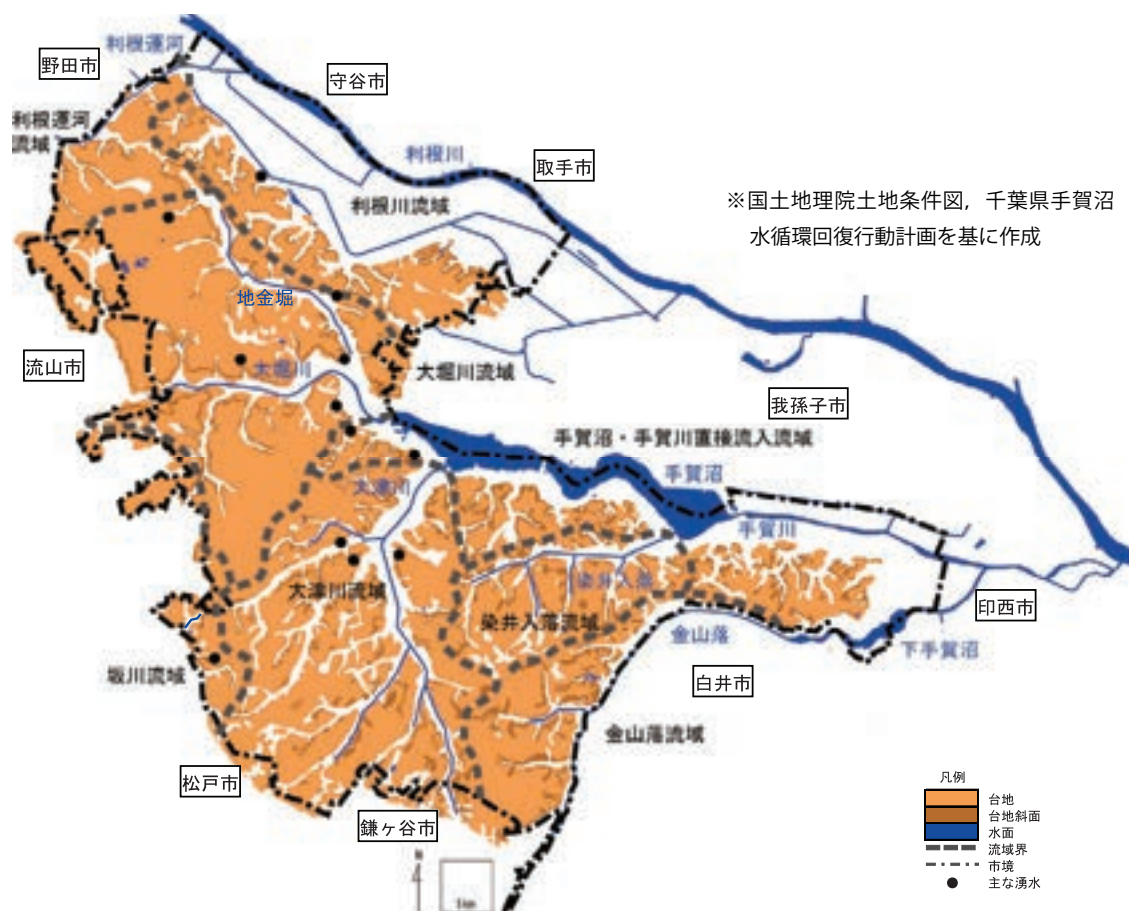


図 1-5：地形と河川流域（柏市環境基本計画第三期より、一部加工し転載）

谷津と谷津田

千葉県に多く見られる里山の風景の一つ。下総台地は小河川の流れによる浸食作用で谷が樹枝状に刻まれ複雑な地形を形成する。「谷津」は侵食作用により削られた、平らな谷底をもつ浅い谷地形を指す。谷津を囲む谷の斜面に樹木が生育して斜面林が生い茂り、谷底部の湿地では、豊富な湧水を利用して古くから稲作が行われてきた水田が広がり、「谷津田」と呼ばれている。

谷津を取り巻く環境は、里山の雑木林・小川や湧水、ため池などの水辺・そして谷あいにかかれた水田などが互いに深く関わりあって形成される。農林業など人の働きかけによる二次的自然環境は、地域が持つ「生物多様性」の大きな要素になるが、農林業従事人口の減少により、里山の風景は急速に失われつつある。

酒井根地区では「^{した}だ^{もり}の杜」において、地権者の里山を守る強い意を汲んだ「NPO法人下田の杜里山フォーラム」が、この里山の保全活動、自然や歴史の調査研究、地域の教育機関への学習支援等を意欲的に行うなど、地権者と行政と連携し、里山の恒久的な保全を目指している。

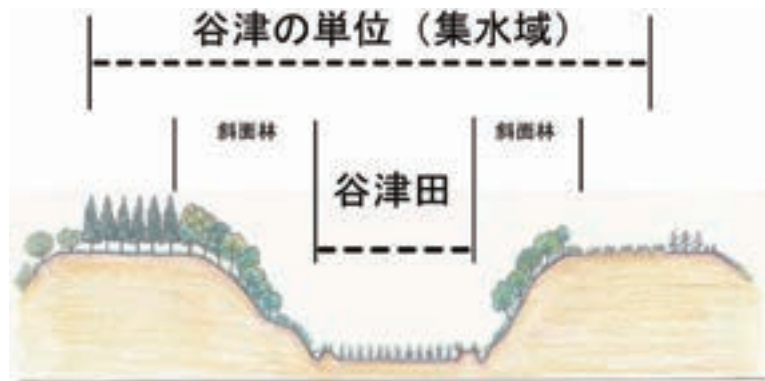


図 1-6：谷津（柏市谷津保全指針より転載）



写真 1-1：手賀沼



写真 1-2：若白毛の谷津田



写真 1-3：大津川河口上流



写真 1-4：利根運河

(4) 気候

千葉県は全般的に穏やかな気候の地域だが、本市はやや内陸に位置するため、冬の気温が比較的低い。関東平野特有の乾いた冷たい季節風（空っ風）筑波^{おろし}風が吹き、降水量は少なく、晴天が続く。農家の宅地防風林（高垣、クネ）も北ないし、西側を厚く仕立てる傾向があり、この風を弱めることを主な目的としている。降雪は少なく、稀にしか積もらない。

春は、低気圧が本州南岸を東進する頻度が高くなり、雨がよく降るようになる。3月下旬から4月上旬にはソメイヨシノが開花し、時を同じくして市指定文化財である逆井の「カタクリ群生地」も満開を迎える。常緑広葉樹の多い山林では、新緑の頃となると目が覚めるような美しさとなる。5月を中心としてひょうや雷雨が珍しくない。

梅雨期の降水量が比較的小さく9、10月の降水量が目立って多いことも特徴である。夏は東京湾からの南風が卓越する。秋には放射霧が発生することが多い。この気候条件は、醤油の醸造に良いといわれており、近世の花野井吉田家や鷺野谷染谷家での醤油醸造業において、利根川舟運による輸送条件が良かったことに加え、この気候条件が有利に働いたと考えられる。

表 1-1：年度別気象の状況（柏市統計書より作成（資料：消防局））

年度	気温（℃）			風向 最多風向	平均風速 (m/s)	平均湿度	雨量（mm）	
	最高	最低	平均				最大日量	降雨量
平成 27 (2015)	38.2	- 2.3	16.4	北北西	2.2	70.7	114.5	3,203.0
平成 28 (2016)	38.3	- 2.3	16.3	東北東	2.2	71.1	103.0	1,412.0
平成 29 (2017)	37.1	- 4.3	15.6	北北西	2.4	69.3	106.5	1,124.5
平成 30 (2018)	39.4	- 3.6	16.6	南	2.5	70.6	60.5	1,088.5
令和 1 (2019)	37.3	- 2.5	16.5	北北西	2.4	70.1	170.0	1,401.0
令和 2 (2020)	37.9	- 3.6	16.6	北北西	2.4	72.7	61.5	1,122.5

(5) 動植物

動物

哺乳類はカヤネズミ、イノシシ、ニホンノウサギ、ホンドイタチ、ホンドタヌキ、ハクビシン、アライグマ、アズマモグラのほか、アブラコウモリ、アカネズミ、キョンが確認されている。

爬虫類は、カナヘビ、アオダイショウ、ニホンマムシ、ヒバカリ、シマヘビ、ヤマカガシ、シロマダラ、ニホントカゲ、クサガメ、ミシシippアカミミガメ、スッポンが確認されている。

両生類は、ニホンアマガエル、トキョウダルマガエル、ニホンアカガエル、ウシガエル、アズマヒキガエル、シュレーゲルアオガエル、ヌマガエル、ツチガエルが確認されているが、護岸工事等の影響で、生息環境は悪化の一途を辿る。

鳥類は、74種が確認されている。手賀沼や利根川に集まる水鳥が多いことが特徴であるが、水質汚濁により特に潜水採餌ガモの減少は深刻である。カンムリカイツブリ、バン、クイナ、ヨシゴイ、ホオジロガモ、ヒクイナの確認は特筆できる。

昆虫類は、チョウ目に属する103種、バッタ目37種、カメムシ目53種、甲虫目77種、ハチ目45種、ハエ目45種、カマキリ目6種が確認されている。チョウ目のヒメシジミとギンイチモンジセセリの確認は環境省指定の純絶滅危惧種で特筆できる。

水生生物は、河川水生生物として、コイ、クロダハゼ、ヌマチチブのほか、上流部ではタイリクバラタナゴ、ミナミメダカ、オイカワ、スゴモロコ、中流部ではオイカワ、スゴモロコ、河口部ではツチフキやギンブナが見られる。谷津湧水地水生生物として、サワガニ、オニヤンマのヤゴ、餌となるヨコエビやミズムシが確認されている。

植物

市域の植物の生育環境についてまとめると、大きく①深い樹林、②明るい樹林、③草地、④湿地の4つのタイプに大きく分けられる。

- ①深い樹林とは、市域の代表的な常緑広葉樹であるシラカシ、アカガシ、スダジイと針葉常緑樹であるスギ、ヒノキ、サワラが主体となる、ある程度の規模を持つ樹林である。日光の照射が少ない林内では、ラン類とイチヤクソウ類が確認されており、「手賀沼里山クラブ[※]」では船戸古墳群において難しいと言われる保全に成功している。
- ②明るい樹林とは、市域の代表的な落葉樹であるイヌシデ、コナラ、クヌギを主体とした樹林である。樹林内では春先にヒトリシズカ、チゴユリ、ジュウニヒトエなどが一斉に開花を始める。夏にはミズタマソウ、キツネノカミソリ、秋にはカシワバハグマやイヌショウマ、ツクバトリカブトなどが見られる。
- ③草地とは、現在は利根川や利根運河土手などの河川土手など局所的にしか残されていないが、かつては人々が利用していた茅原や田圃や畑地の周囲に多く広がっていた。江戸時代の小金牧も広大な草地であったが、現在はその面影は殆ど見られない。利根川、利根運河土手では春から初夏にかけてアマナ、キンポウゲ、フナバラソウ、秋はワレモコウなどの花が彩る。
- ④湿地は手賀沼、利根川、利根運河周辺に広がる池畔湿地、河川敷湿地と谷津湿地がある。湿地の多くは水田として利用されており、水田周辺湿地が形成される。利根川河川敷ではシロバナタカアザミ、コキツネノボタン、ノウルシ、ノカラマツなど県下でも希少な植物が見られる。

※平成23年（2011）に発足した、ボランティアで里山などの整備保全を行う団体。柏市大井の船戸古墳群を活動場所としている。

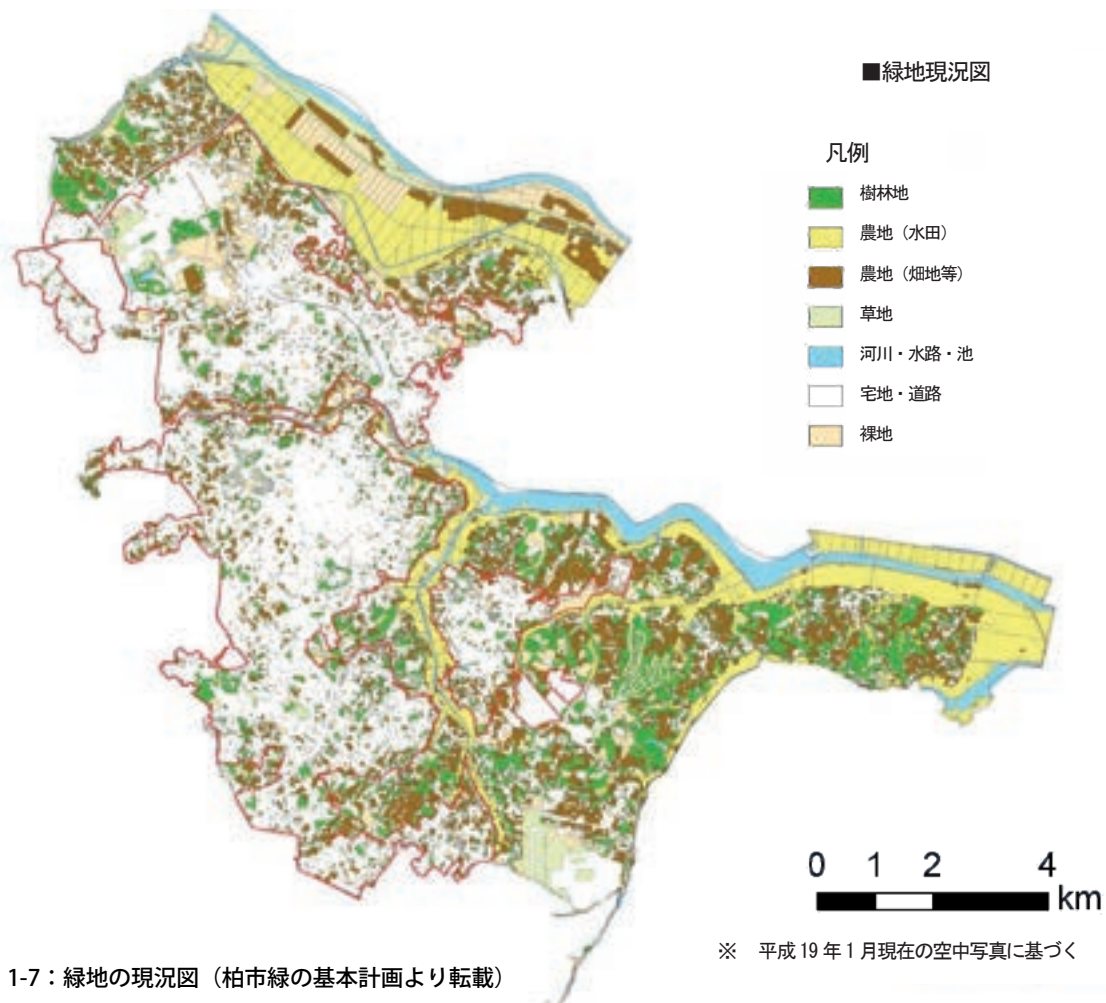


図 1-7：緑地の現況図（柏市緑の基本計画より転載）

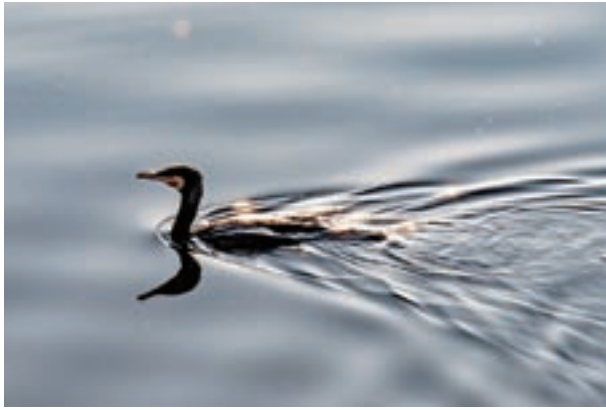


写真 1-5：手賀沼の水鳥



写真 1-6：シュレーゲルアオガエル
「柏市生きもの多様性プラン」より転載

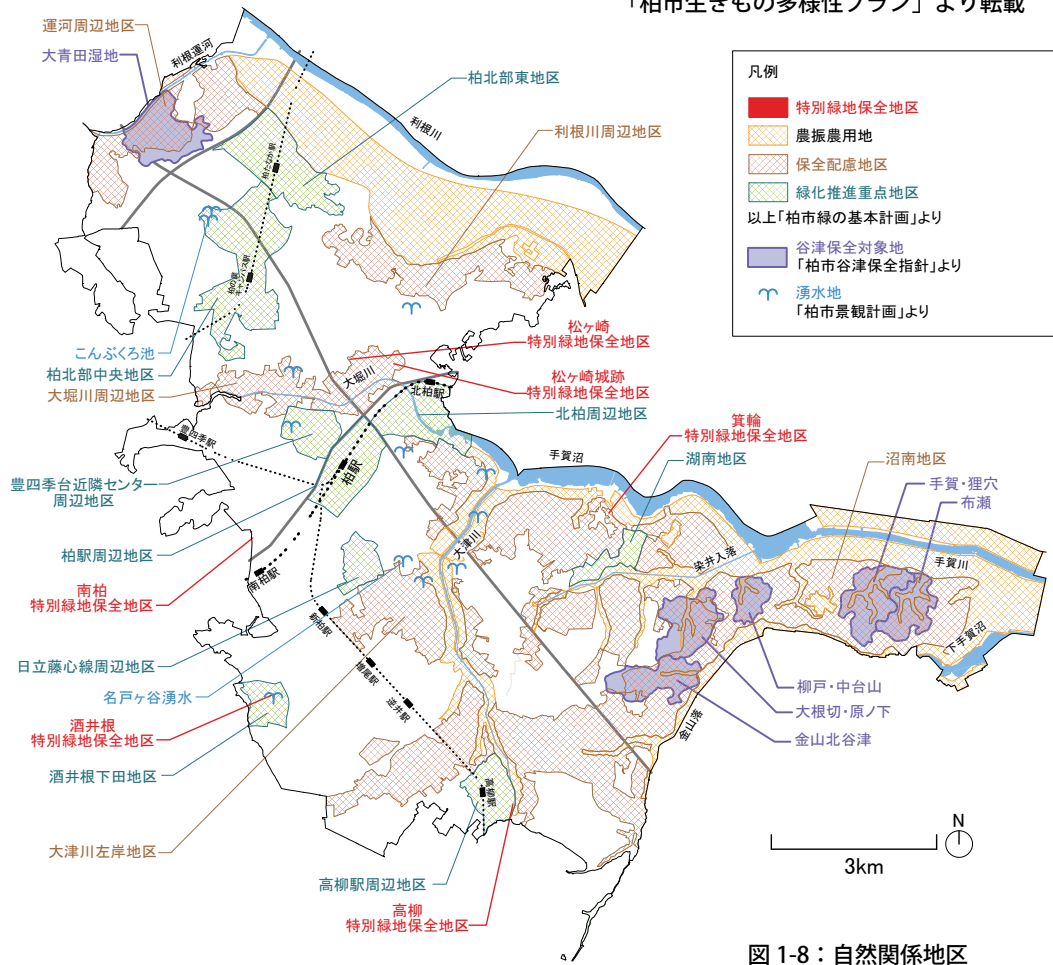


写真 1-7：こんぶくろ池



写真 1-8：手賀の丘公園

(6) 水辺と緑の拠点

市都市計画マスタープランでは、水辺と緑の拠点は都市環境、生物多様性、レクリエーション、防災、景観に大きく寄与する役割を担うものとしており、これらの保全、整備、活用を進めている。この拠点の中には、文化遺産が残されており、自然環境や周辺環境と一体をなして地域の特徴的な景観を形づくる場所がある。以下に代表的なものを例示する。

表 1-2：水辺と緑の拠点

名称	場所	内容
① 手賀の丘公園	片山	片山古墳群，オッコシ古墳群
② 柏ふるさと公園	柏下	天神台古墳群
③ 増尾城址総合公園	増尾	増尾城址，南小橋遺跡
④ きつね山歴史公園	増尾	幸谷城館跡，高島野十郎（大正～昭和の画家）アトリエ跡地， 国登録有形文化財 伊藤家住宅主屋ほか 6 棟
⑤ 戸張地区公園	戸張	戸張一番割遺跡
⑥ 旧吉田家住宅歴史公園	花野井	国指定重要文化財 旧吉田家住宅主屋ほか 7 棟 国登録記念物 旧吉田氏庭園
⑦ 水辺の拠点	曙橋	手賀沼アグリビジネスパーク事業の一環で整備
⑧ 下田の杜	酒井根	野馬土手，堀，まてや（附属屋），稲荷様の杜
⑨ 運河ふれあい水辺拠点	大青田	利根運河，大青田貝層
⑩ あげぼの山農業公園	布施	千葉県指定有形文化財 東海寺本堂・楼門・鐘楼，弁天古墳， 旧橋本旅館
⑪ こんぶくろ池自然博物公園	柏の葉	野馬土手，柏飛行場秋水燃料庫・掩体壕
⑫ 豊四季第一緑地， 日立台スポーツ拠点	豊四季 日立台	野馬土手

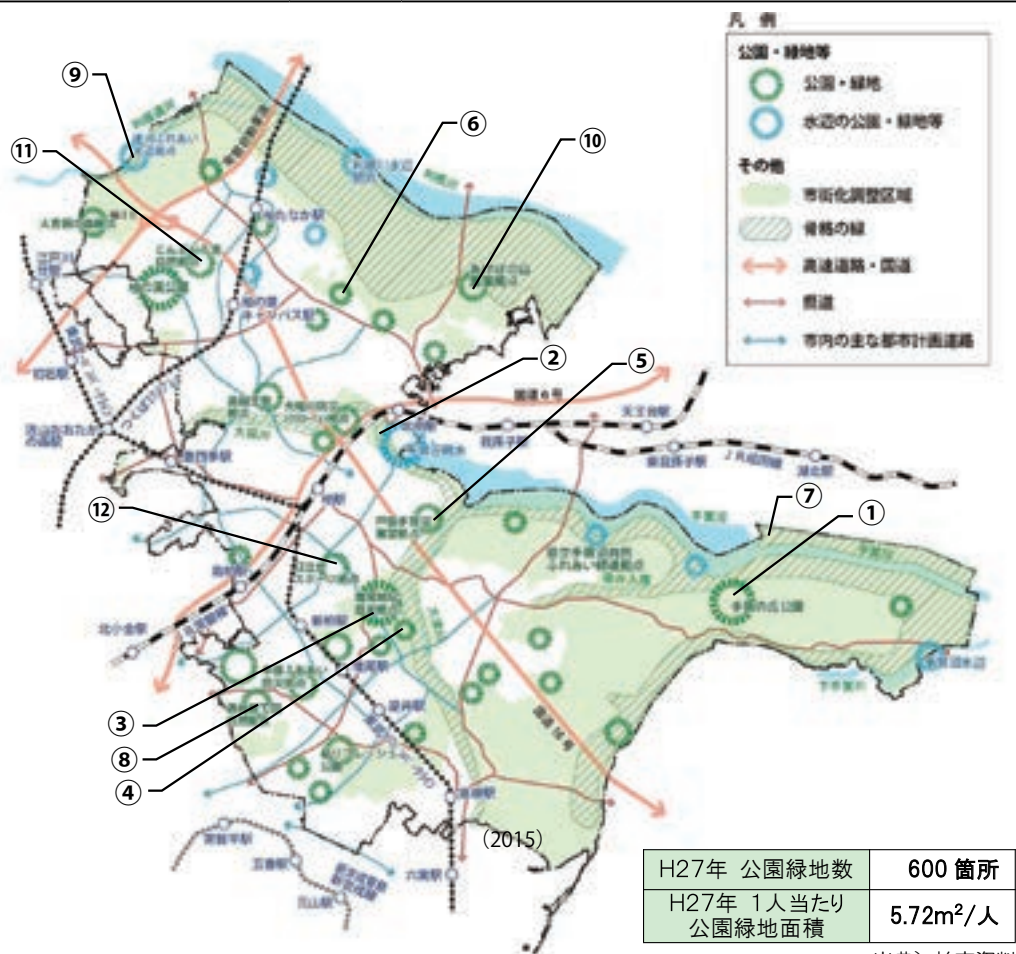


図 1-9：公園・緑地など位置図（柏市都市計画マスタープランより転載）

(7) 景観

「柏市景観計画」では柏の景観骨格として、柏の地形特性によって形成された河川や沼などの水辺や緑の連なり（水と緑のベルト）、柏の自然・田園環境を支える集落地のうち昔ながらの集落景観のまとまりや連なりを有するもの（田園集落拠点〈なつかしゾーン〉）、商業・業務地及び都市型住宅地で構成される駅周辺に沼南地域の中心部となる大津ヶ丘・大島田地区を加えた地域（都市拠点）を位置づけている。

①水と緑のベルト

- ・利根川、手賀沼といった県内でも有数の河川・水辺とともに、利根運河、大堀川、大津川、染井入落、金山落などが柏市の水と緑の骨格となっている。
- ・水辺に接して田畑が広がっており、斜面林が地形の起伏に合わせてやわらかくそれらを包んでいる。
- ・斜面林を除くおおよその地域は市街化調整区域である。

②田園集落拠点〈なつかしゾーン〉

- ・昔ながらの面影を残す集落が点在している。
- ・田園や斜面林と集落が隣り合うように形成され、柏の原風景を今に伝えている。
- ・集落地内には農家住宅、長屋門、寺社等の歴史的な景観資源が存在している。

③都市拠点-(1) 広域的な拠点や市の顔となる駅前、商業業務地区

- ・柏市の広域的な拠点であると共に、柏の顔となる駅前や商業地区を有している。
- ・柏駅とその周辺は重要な景観的骨格であり、広域的な商圈をかかえる商業業務地となっている。
- ・柏の葉キャンパス駅周辺は北部中央地区の中核的な場所であり新たなまちづくりが進められている。

都市拠点-(2) 地域の拠点となる駅前、行政サービス拠点となる地区

- ・市民の日常的な活動に密着した地域の拠点である。
- ・駅前やその周辺は、商業地区や都市型住宅を有し、地域の景観的な骨格にもなっている。
- ・柏たなか駅や高柳駅周辺では、土地区画整理事業が進められ、新たな駅前の顔づくりが進められている。



図 1-10：景観骨格図（柏市景観計画より転載）

1-2. 社会的状況

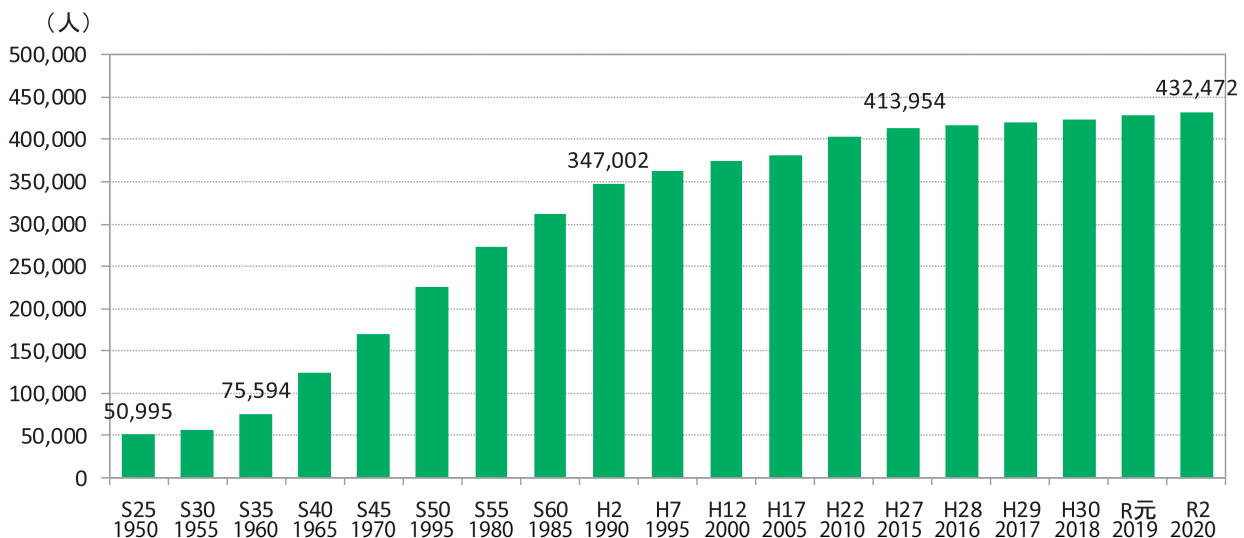
(1) 人口動態

令和2年(2020)8月1日時点の住民基本台帳に基づく本市の総人口は432,472人である。本市の総人口は戦後一貫した増加傾向にあり、特に昭和35年(1960)から平成2年(1990)の30年間で271,408人が増加し、急激に市街化が進展したが、平成以降は一桁台の増加率にとどまっている。近年の柏の葉キャンパスの開発の影響で、平成17年(2005)から平成22年(2010)の期間の人口増加率は平成に入ってから最も高い6.1%を記録した。その後平成23年(2011)3月11日に発災した東日本大震災の影響もあり、人口増加率は1.0%に低下したが、直近の5年間は4.5%に上昇している。

本市の総人口は、令和7年(2025)の433,481人をピークに減少に転じ、令和32年(2050)は401,994人となる見込みである。年少人口・生産年齢人口は平成22年(2010)がピーク、老年人口は令和32年(2050)がピークとなり、2050年のそれぞれの構成割合では約3分の1が65歳以上となる。

通勤・通学について、市民の4人に1人が都心4区で従業・通学している一方、流入元は、周辺市の合計が5割強を占めている。

表1-3：総人口の推移（柏市人口ビジョンより転載）



(出典) 国勢調査, 千葉県毎月常住人口調査(昭和25(1950)年~令和元(2019)年までは各年10月1日現在人口, 令和2(2020)年は8月1日現在人口)

注1) 平成12(2000)年以前の総人口は沼南町の総人口を合計したもの。

注2) 平成24(2012)年7月適用の住民基本台帳法の一部改正により、平成24(2012)年8月以降は住民基本台帳法の適用対象に外国人人口が含まれる。

表1-4：各期間の人口増加率（柏市人口ビジョンより転載）

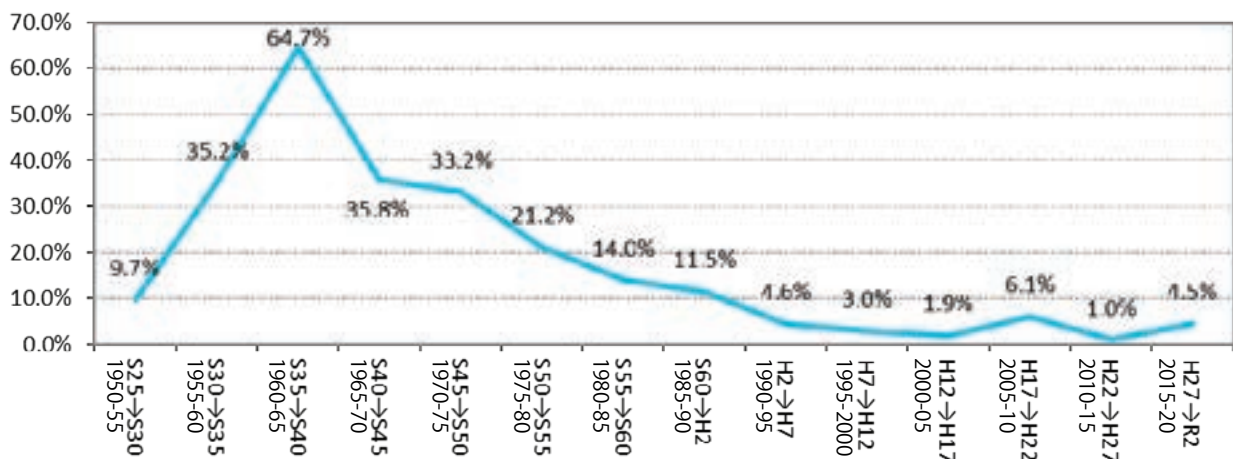
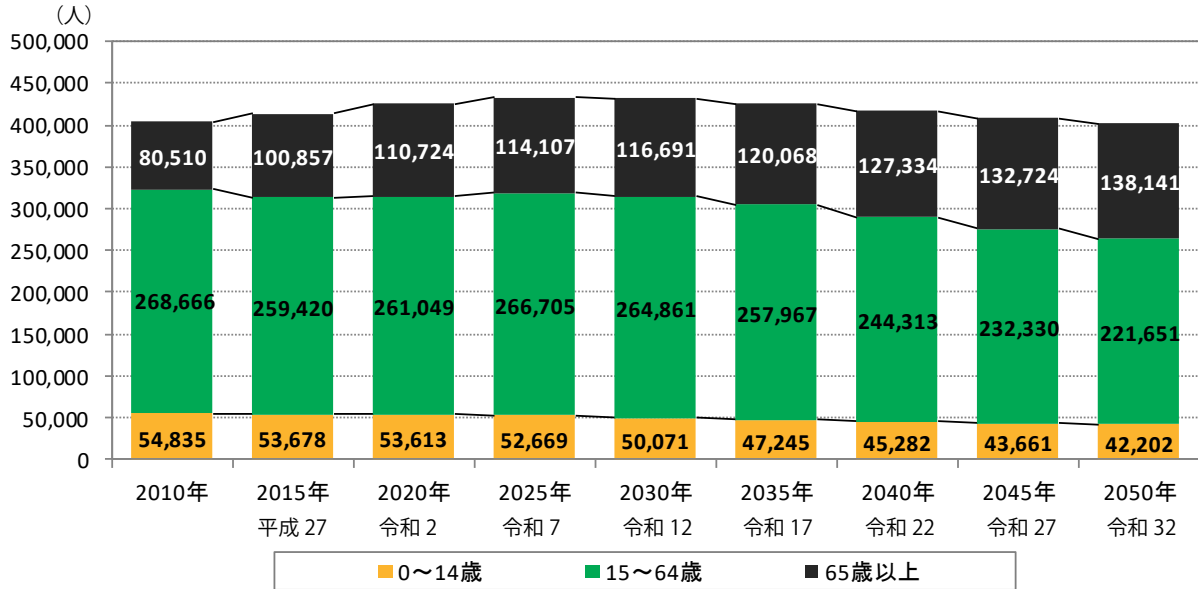


表 1-5：年齢 3 区分別将来人口推計（柏市人口ビジョンより転載）

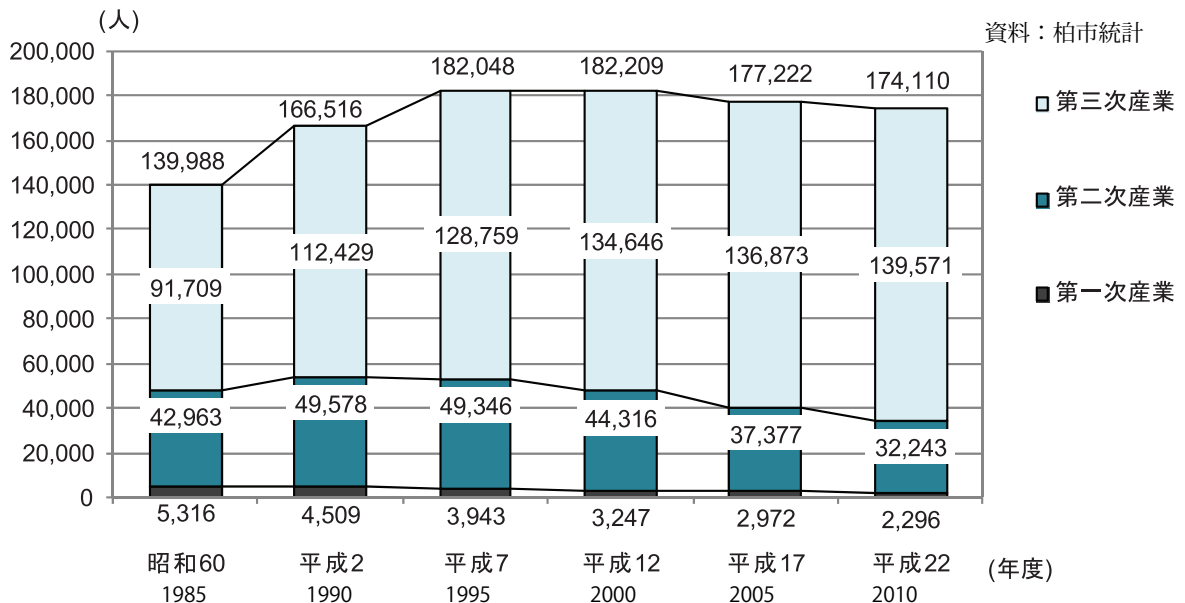


(2) 産業

交通の要衝であること等を背景に、商業・工業や物流企業の県内有数の集積地として、また大消費地に近い都市近郊農業地域として発展してきたほか、県北西部の商業の中心として周辺から多数の買い物客を集めてきた。しかし、交通ネットワークのさらなる進展に伴う地方部への工業立地・移転等の進展等も含めた市内の事業所数・従業者数・出荷額等の継続的な減少、人口減や郊外型店舗の進出等による柏駅周辺をはじめとする既存商店街の商圈縮小や集客力低下、高齢化等による農業従事者や産出額の減少等が懸念されている。

市内の就業者数は、平成 12 年(2000)をピークに減少傾向に転じた。第三次産業は増加を続けているが、第一次産業は減少を続け、第二次産業は平成 2 年(1990)をピークに減少に転じた。第二次産業の減少の主な要因は製造業の市外移転で、製造品出荷額等は平成 2 年(1990)の約 5,123 億円をピークとして、平成 25 年(2013)には約 2,600 億円まで減少している。第一次産業の農業については、他産業への就業、農地集積の進展等により、本市の農業就業人口は平成 2 年(1990)から平成 22 年(2010)までの 20 年間で 5 割に、農家数は 6 割の水準に減少した。

表 1-6：市内の就業者数の推移（柏市環境基本計画より転載）



農業

柏市は人口約 43 万人が生活する中核市であるとともに、様々な農産物を生産する産地である。都心に近く、人口増加地域であることを反映して、近郊農業が行われている。市の総面積 11,490 ha のうち、農地面積は 2,960 ha となっており、市の総面積の約 4 分の 1 を農地が占めている。また、市街化区域にも約 325 ha の農地が存在している。特に手賀・風早地区は農村の原風景を維持している。

農地は、田畑の割合が概ね半々となっており、水田は、利根川沿線と手賀沼周辺の平野部の他、丘陵部には狭小な谷津田も立地する。また、畑作では、古くからかぶ、ねぎ、ほうれんそうなどの露地野菜が多く生産されており、特にかぶは日本一の生産量である。また、チンゲン菜は日本で初めて柏市で栽培をされた。市場からは新鮮で品質の揃った野菜をまとめて出荷できる産地として高い評価を得ている。

また、古くから梨の生産も盛んで、市内各地の梨園において消費者への販売や卸売市場への出荷も行われている。そのほか、ブルーベリーやいちごの摘み取りなどができる観光農園も積極的に展開されている。

近年は高齢化や後継者・労働力不足などから担い手の減少が続いており、耕地面積の減少や荒廃農地面積の増加など、本市の農業を取り巻く環境は年々厳しさを増している。これまで良好に維持されてきた農村風景は農林業など人の働きかけにより維持されてきた二次的自然環境である。また、農村風景の構成要素である建造物や祭り、年中行事などの文化財は、そこに住まい働く人々の信仰や価値観に支えられて維持管理されてきたものである。そういった意味で農村コミュニティと文化財の保存・活用は表裏一体であり、これからの文化財の保存・活用は、従来の農村のコミュニティに頼ることは難しいと思われる。その資金調達方法や維持管理主体者、活用主体者の再構築が求められるであろう。

その一方で新たな技術の導入や商品開発、販路拡大など、経営改善に積極的に取り組み、活躍している農業者も増加しており、しょうなん地区（農業振興計画）においては、都市と農村交流、観光・レクリエーション振興による新たな交流の地域づくりを目指す「手賀沼アグリビジネスパーク事業」が、「手賀沼アグリビジネスパーク事業推進協議会」とともに進められている。市が道の駅しょうなんなどの施設整備を進める一方、協議会は、主に農業、自然、歴史・文化といった地域資源を活用した体験プログラムづくりや、イベントなどの活動支援、地域の魅力発信といった取り組みを通じて、地域で活動している農業者、市民団体、事業者、学校など、多様な主体とのネットワークを構築しながら、手賀沼地域全体の活性化を目指している。

今後は、手賀沼地域のファンづくりだけでなく、地域農業の課題解決や、多様な主体が交流するプラットフォームづくり、中間支援といった、手賀沼地域のまちづくりを担う「手賀沼まちづくりセンター」への発展を目指している。

また、市内には直売所の数も多く、平成 13 年（2001）に「道の駅しょうなん」と平成 16 年（2004）に「かしわで」と、相次いで大型直売所が開業し、令和 3 年（2021）には「道の駅しょうなん」新棟が開所し、令和 4 年（2022）に旧棟が新装し開所した。大型直売所は、多くの農業者の販路となり、農業所得の向上に貢献するとともに、新鮮な地元農産物を市内で販売することで、地産地消を推進してきた。近年では市内スーパーマーケットにも地元農産物販売コーナーが設置されるなど、身近な販路と消費の場が増えている。



写真 1-9：大井新田



写真 1-10：鷲野谷の貸農園

工業

昭和30年代（1955-64）に東京から安価な土地を求めて進出してきた多くの中小企業によって発展してきた。特に昭和40年代（1965-74）から、柏市は急速な都市化・人口急増にともなって増加した労働力の吸収と市の財政基盤確立のために工業団地を次々と完成させ、これにより、県内有数の工業都市へと発展した。

柏市は、首都圏の産業都市を結ぶ国道16号線沿線にあり、東京と筑波研究学園都市の中間に位置しているほか、成田国際空港にも近いなど、地理的に有利な条件を持っている。また、つくばエクスプレスの開通は、より一層の交通の利便性・都市機能のアップに拍車がかかるものとして期待されている。

商業

人口増加とともに商業が盛んになり、駅前商店街や住宅地に近い近隣型商店街が発達した。昭和45年（1970）から柏駅東口市街地再開発事業が始まると大型の百貨店がオープンし、柏駅周辺の商店の商圏がとてま広くなり、商業都市として大きく発展した。

観光

市内には、手賀沼やあけぼの山農業公園、国の重要文化財である旧吉田家住宅、柏駅周辺の商業エリア、環境未来都市の実現に取り組んでいる柏の葉エリア等、自然の豊かさと都会の町並みの両方を有しており、多様な観光資源が存在する。さらに、サッカーJリーグの柏レイソルやバスケットボールENEOSサンフローズのホームタウンでもある。柏の葉エリアでは、東京大学や千葉大学の研究施設の集積等があり、特色となっている。また近隣市の中でも、魅力ある行祭事やイベントも数多くあり、観光入込客数の中でもイベント関係の入込の割合が高くなっているのが特徴である。観光地点別で最も多いのは、「県立柏の葉公園」が105万人、次いで「道の駅しょうなん」が90万人である。（令和2年（2020）千葉県観光入込調査報告書）

昨今はコロナ禍の影響もありマイクロツーリズムが注目され、柏インフォメーションセンターや奥手賀ツーリズムなどが、市内の自然や歴史文化をめぐる情報発信やツアー、体験プログラムを提供しており、特に奥手賀ツーリズムや、手賀沼アグリは里山の荒廃や耕作放棄地などの地域課題を里山整備や収穫体験などの学習プログラムとしてパッケージ化を試みている。また、出張で宿だけ市内にとる人から、2～3時間で観光できる場所の需要がある。

表1-7：観光客の数（令和2年（2020）千葉県観光入込調査報告書を編集し作成）

地域名	市町村名	観光入込客数 (延べ人数) (X=A+B) (単位： 人地点)	調査対象 地点 (a+B)	観光地点		行祭事・イベント		宿泊客数(C) (単位： 人泊)	宿泊施設 調査対象 地点数	Cのうち 外国人 宿泊客数 (単位： 人泊)	Cのうち 修学 旅行客数 (単位： 人泊)
				調査対象 地点 (a)	入込客数 (延べ人数)(A) (単位： 人地点)	調査対象 地点 (b)	入込客数 (延べ人数) (B) (単位： 人地点)				
県内総数		108,161,853	614	556	103,091,460	58	5,070,393	8,996,980	874	728,838	59,269
東葛飾地域		27,100,763	71	62	26,548,173	9	552,590	3,118,549	90	96,207	38,882
	柏市	2,393,981	7	5	2,282,077	2	111,904	300,675	11	8,565	0

(3) 土地利用と変遷

人口増加に伴う開発事業の高まりによって、市街化区域を拡大してきたことにより、昭和50年（1975）は4,480haだったが、平成23年（2011）には5,453haとなり、行政区域全体に占める割合も38.8%から47.5%に上昇している。市街化区域における平成19年（2007）と平成24年（2012）の土地利用区分別の面積を比較すると、住宅用地と商業用地が増加する一方、農業従事者の高齢化や後継者不足等の

理由から、田畑が減少している。

令和3年(2021)の土地の地目は、宅地(33.3%)が最も多く、その大半を住宅地が占める。市内の農地は田畑を合わせると24.7%となる。平成17年(2005)の沼南町との合併により、農用地と山林が大幅に増加した。経年変化を見ると、都市化に伴い、宅地が継続的に増加する一方、田畑や山林が減少している。

「柏市第五次総合計画」においては、行政機能や商業・業務機能等の高次都市機能が集積する柏駅周辺地区、及び最先端の研究を推進する大学や公的研究機関が緑豊かな環境の中に立地する柏の葉キャンパス駅周辺地区を「都市拠点」として位置付け、多様な都市機能の集積、支所機能等を含めた施設等の集約によって拠点性のさらなる向上を目指し、沼南支所周辺地域を市内外の多くの人々が交流できる「ふれあい交流拠点」に位置づけ、商業・文化・教育等の強化や鉄道駅及び背後地に広がる手賀沼周辺観光エリアへのアク

表 1-8：土地の地目別面積の推移（柏市統計書より作成）

区 分	平成 28 年 (2016)		平成 29 年 (2017)		平成 30 年 (2018)		平成 31 年 (2019)		令和 2 年 (2020)		令和 3 年 (2021)	
	面積 (m ²)	構成比 (%)	面積 (m ²)	構成比 (%)	面積 (m ²)	構成比 (%)	面積 (m ²)	構成比 (%)	面積 (m ²)	構成比 (%)	面積 (m ²)	構成比 (%)
総数	114,740,000	100.00	114,740,000	100.00	114,740,000	100.00	114,740,000	100.00	114,740,000	100.00	114,740,000	100.00
宅地の計	36,680,214	31.97	37,356,589	32.56	37,705,277	32.86	37,868,863	33.00	38,052,255	33.16	38,203,179	33.30
工業地	2,552,207	2.22	2,619,886	2.28	2,671,575	2.33	2,671,127	2.33	2,672,976	2.33	2,684,879	2.34
商業地	817,858	0.71	978,000	0.85	956,114	0.83	960,274	0.84	962,685	0.84	955,695	0.83
住宅地	29,057,474	25.32	29,512,261	25.72	29,793,632	25.97	29,941,959	26.10	30,135,861	26.26	30,283,012	26.39
その他	4,252,675	3.71	4,246,442	3.70	4,283,956	3.73	4,295,503	3.74	4,280,733	3.73	4,279,593	3.73
田	14,001,155	12.20	13,988,432	12.19	13,971,909	12.18	13,949,009	12.16	13,886,111	12.10	13,876,198	12.09
畑	15,513,102	13.52	15,167,597	13.22	14,959,665	13.04	14,817,918	12.91	14,638,276	12.76	14,504,186	12.64
山 林	7,687,211	6.70	7,446,993	6.49	7,333,529	6.39	7,259,808	6.33	7,212,028	6.29	7,124,582	6.21
原 野	763,486	0.67	644,601	0.56	597,743	0.52	595,399	0.52	658,174	0.57	658,976	0.57
池 沼	642,364	0.56	642,364	0.56	642,364	0.56	642,726	0.56	640,741	0.56	640,741	0.56
雑種地の計	10,807,704	9.42	10,496,904	9.15	10,542,729	9.19	10,542,002	9.19	10,498,321	9.15	10,530,664	9.18
ゴルフ場・鉄軌道等	1,223,449	1.07	1,217,852	1.06	1,217,257	1.06	1,217,017	1.06	1,216,983	1.06	1,216,984	1.06
その他の雑種地	9,584,255	8.35	9,279,052	8.09	9,325,472	8.13	9,324,985	8.13	9,281,338	8.09	9,313,680	8.12
その他	28,644,764	24.96	28,996,520	25.27	28,986,784	25.26	29,064,275	25.33	29,154,094	25.41	29,201,474	25.45

資料 資産税課「固定資産概要調査」



図 1-11：市街化調整区域（柏市都市計画マスタープランより転載）

セス向上，ターミナル機能の導入を図る。さらに，それぞれの拠点と地域が交通網等によりネットワーク化され，互いに機能を補完し合う等により，市全体としてサービス水準を高めていくことを方向性に示す。

本市の市街地拡大の変遷については，昭和30年代(1955-64)以降，大規模な住宅団地の整備が順次進み，その後も駅前外部での低層住宅地の拡大等により市街地が形成され，都心部のベッドタウンとして人口が急増した。昭和50年代(1975-1984)には，さらなる住宅団地の整備が進み，住宅供給がより一層進んだ。近年では，市の北部にて，平成17年(2005)のつくばエクスプレスの開通に合わせ，自然的土地利用が多数あった沿線にて大規模な都市基盤整備及び住宅地整備が順次進んでいる。D I D(人口集中地区)の変遷としては，昭和45年(1960)の線引き開始当初は，主に常磐線沿線に広がっていたが，その後，平成2年(1990)時点では，東武野田線沿いや沼南支所周辺においても分布が見られ，平成22年(2010)時点では，つくばエクスプレス沿線，高柳駅東口等以外は，市街化区域と同一の広がりが見られる。

(4) 交通

鉄道は市域中央にJR常磐線が，市域北部にはつくばエクスプレス線(TX)が通り，東京都心部を結んでいる。南北方向には東武アーバンパークライン(東武鉄道野田線)が通り，埼玉都心部及び東京湾岸を結んでいる。路線バスも市街化区域を中心に運行しており，公共交通機関が未整備である南逆井，大津ヶ丘縁辺部等の一部の地域では，かしわ乗り合いジャンボタクシーを運行している。

道路は国道6号・16号，常磐自動車道等が通り，首都圏の放射状・環状両方向の交差点に位置して，自動車交通の要となっている。歴史的には，江戸時代に利根川の水運が開発され，明治時代には利根運河が開削されたが，徐々に鉄道に取って替わった。



近現代交通関係年表

明治 21 (1888)	利根運河の開削開始。
明治 23 (1890)	利根運河開削竣工
明治 29 (1896)	日本鉄道株式会社土浦線(現常磐線)，田端―土浦間開通。柏駅開設。
明治 44 (1911)	県営軽便鉄道(後に北総鉄道へ払下げ) 柏―野田間開通
大正 8 (1919)	陸前浜街道(水戸街道)が国道6号線となる。
大正 12 (1923)	北総鉄道株式会社 柏―船橋間開通(後の東武鉄道野田線)
昭和 55 (1980)	新大利根橋有料道路(県道47号守谷流山線の一部)開通
昭和 56 (1981)	常磐自動車道 柏―矢田部(茨城)間開通
平成 17 (2005)	つくばエクスプレス線開業

出典) 交通事業者資料，柏市資料

図 1-12：柏市の交通(柏市都市計画マスタープランより転載)

(5) 文化施設

市で所有する文化施設は以下の通りである。

表 1-9：市内の文化施設

名称	場所	概要
① 柏市郷土資料展示室	大島田（柏市沼南庁舎内）	市に関する文化財資料・歴史資料などのほか美術品（砂川コレクション）を展示する施設。 柏市郷土資料展示室では「郷土かしわ」への興味と理解を深めてもらうことを目的として展示をおこなっている。常設展示では原始・古代、中・近世、近代以降のテーマで遺物などを展示し紹介しており、定期的に柏市の歴史や所蔵美術品に関する企画展を開催している。
② 柏市文化財整理室	十余二	市内の考古資料や、民俗資料などの保管・管理、整理作業を行う。
③ 柏市立図書館本館	柏	蔵書数約31万冊の図書館。
柏プラネタリウム	柏（柏市立図書館内）	45席で公立のプラネタリウムとしては全国で三番目の小ささ。柏プラネタリウム研究会（有志）により、月1回ほど投影を行う。
④ 柏市立図書館分館	豊四季台、田中、西原、南部、布施、永楽台、増尾、光ヶ丘、新富、高田、根戸、新田原、松葉、藤心、沼南、高柳の16か所	蔵書数約2～5万冊の図書館。
⑤ こども図書館	大島田（柏市沼南庁舎内）	乳幼児とその保護者を主な対象者とした図書館。
⑥ 中央公民館	柏（教育福祉会館内）	青少年教育、成人教育、家庭教育、高齢者教育、地域づくりの事業、イベントを行う施設。会議室、集会室、料理実習室、音楽室、講堂などからなる。
⑦ 市民文化会館	柏	芸術・文化・創作発表・鑑賞のための大ホール（1,338席）小ホール（300席）を備える施設。
⑧ アミュゼ柏	柏	ホール（400席）やプラザ（展示）などの文化施設と柏中央近隣センターからなる複合施設。
⑨ パレット柏	柏	柏市民交流センター、柏市民ギャラリー、柏市国際交流センター、柏市男女共同参画センター、市民活動サポートセンターの5つの施設の複合施設。
柏市民ギャラリー	柏（パレット柏内）	市民の美術・工芸作品の発表及び鑑賞の場。
⑩ 青少年センター	十余二	研修室、創作室、多目的室、キャンプ場、グラウンドから成る市内の青少年の研修や講習の場。
⑪ わしのや農業交流拠点	鷲野谷	手賀沼地域の周遊における拠点（休憩スペース）、周辺の体験農園等、地域の利便性向上のために整備された施設。

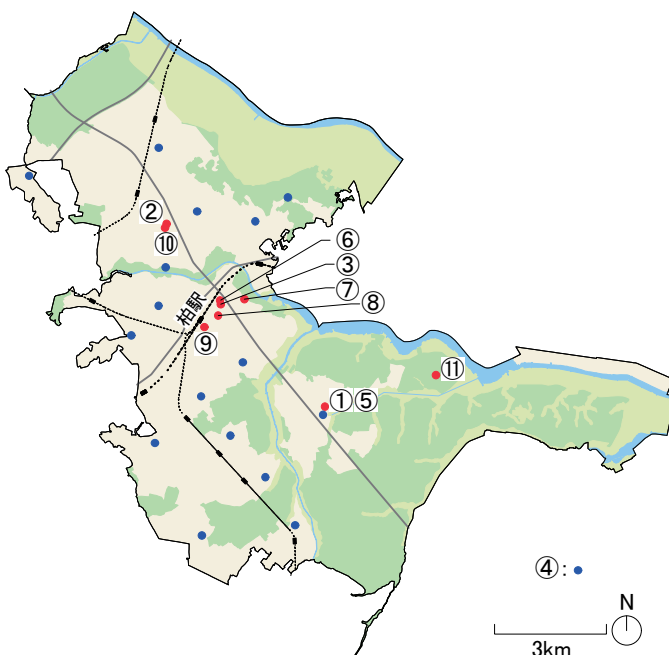


図 1-13：市内文化施設の位置



写真 1-11：柏市郷土資料展示室 1



写真 1-12：柏市郷土資料展示室 2

1-3. 歴史的背景

(1) プロローグ

市域の歴史と切っても切れない関係にあるものは、今となっては意外であるが「海」である。そもそも市域は海底であったし、大地が形成され人類が住み始めてからは、大きな「内海」に挟まれた地域であった。内海に挟まれた大地は房総半島と本州を繋ぐ唯一の「自然道」であり、市域はその接点に位置した。これらの自然環境が市域の歴史に大きな影響を与えてきており、重要なポイントとなるため、市域の歴史的背景を説明する前に、「自然道」については①自然に形づくられた交通路として、「内海」については②柏の大地にまつわる「内海」として解説した上で、(2) 歴史概況へ入る。

①自然に形づくられた交通路（下野—北総回廊^{しもつけ ほくそうかいろう}）

現在は近世の利根川の東遷により分断されている分水界は後期旧石器時代の小山台地や宝木台地へ繋がりがさらには宇都宮丘陵へ連なっていた。これらの一連の道は下野—北総回廊と呼ばれ、後期旧石器時代を考える時には、この回廊は主要交通路として重要な意味を持つてくる。この細長い回廊の両側には深い谷と湿地が広がっており、当時、動物はこの道を南北に移動し、人々も動物を追って南北に移動したであろうと考えられている。市内の発掘調査で出土した石材の産地の多くが北関東のものであり、これらの石材が、この回廊を通して市内に搬入されたと推測されていることも、このことの傍証となっている。

市内では縄文時代中期に大集落が形成されることがわかってきているが、これは、この下野—北総回廊と、後述する縄文海進によって「古鬼怒湾^{こきぬわん}」と「奥東京湾」の入江が深く入り込むことと深く関係するようである。現在、つくばエクスプレス開通に伴う周辺の土地区画整理によって明らかとなってきたが、関東でも有数の大規模な環状集落が点在している地域となっていることがわかってきている。

このことは本市が下野と房総半島を結ぶ唯一の狭い交通路であったことや、この交通路が「古鬼怒湾」、「奥東京湾」に挟まれた地点であり、水運と陸路の結節点であることも深く関係しているともいわれている。

この自然道は江戸時代には小林一茶が俳諧の旅に親しんだ日光東往還として使われ、近代以降は東武野田線、現在は国道 16 号が敷設されるなど、現在も重要な陸路として使用されている。

②柏の大地にまつわる「内海」（古東京湾、奥東京湾・古鬼怒湾<香取内海^{かとりのおうみ}>）

地球規模で氷期と間氷期が繰り返される気候変動により、極域の陸上に存在する巨大な氷の塊である氷床が融解・拡大してきた。これに伴い海水の体積が増減し、海水面は上昇・下降を繰り返してきた。その間の火山活動による降灰、地盤自体の隆起・沈降など様々な条件が重なり合い、長い年月をかけ今の本市の大地は作り上げられてきた。

現在の本市と海との関係は断たれているが、歴史を紐解くと意外にも柏は海との関係性の中で発展してきたと言える。ここでは柏の大地の成り立ちを、海との関係を中心に解説する。

また、本地域計画では、いくつか登場する内海の呼称を、学術的呼称として以下のとおり呼ぶこととする。まず、柏に人々が住み始める以前の内海を「古東京湾」、縄文時代に存在した内海を「古鬼怒湾」、「奥東京湾」と呼ぶ。なお、「古鬼怒湾」は、弥生時代以降も中世まで、浅い内海として存在し続けるため、この場合は、便宜上「香取内海」と呼称する。

【古東京湾】

およそ 300 万年前から阿武隈山地や足尾山地、関東山地などの現在の関東平野周辺の山々が急速に隆起し始めるとともに、平野部は沈降し深い盆地状の窪みが形成された。これらの現象は、関東造盆地運動と呼ばれ、今から 100 万年前までの間、山地が隆起し続ける一方で、関東平野の中央部においては逆に

沈降が進み内海が形成された。これを「古東京湾」と呼んでいる。

この内海は、およそ50万年前から6万年前までの間に砂礫や泥によって徐々に埋まって行くが、この堆積層が下総層群と呼ばれる。利根運河周辺で見られる「大青田貝層」はこの下総層群に伴う貝化石で、約13～12万年前に市域が浅い海の潟もしくは内湾であったことを示す。

この下総層群は下总台地の基盤となり、以降、約1万年前まで盛んであった火山活動によって運ばれた火山灰が降り積もり、一般に「赤土」と呼ばれる新期関東ローム層が堆積した。それが、現在の下总台地である。先の「下野—北総回廊」はこの下总台地上のルートである。



図 1-14：田村隆，平成 19 年（2007），『千葉県の歴史』通史編 原始・古代 1（千葉県），図 24「関東地方の地形区分」に柏市域を加筆

【奥東京湾】

縄文時代に入ると、急激な温暖化によって海水面が上昇する「縄文海進」と呼ばれる現象によって、現在の手賀沼や利根川周辺の低地や江戸川周辺の低地などの陸地奥深くまで海水が入り込み、市域は「奥東京湾」と「古鬼怒湾」という大きな2つの内海に挟まれることとなる。

この内海のうち、現在の江戸川周辺の低地に広がっていた内海が「奥東京湾」である。縄文海進最盛期には川越や古河まで海水が入り込んでいたことが、貝塚の分布状況などから分かっている。縄文海退後は現在の江戸川周辺は陸地化するが、巨視的に見れば現東京湾も内海であると言える。そういった意味で、縄文海退以降も柏は現東京湾と香取内海の2つの大きな内海に挟まれた地域であったといえる。

【古鬼怒湾・香取内海】

同じく縄文海進の頃、「奥東京湾」から「下野—北総回廊」を挟んで東側では、現在の利根川、手賀沼周辺の低地にも海水が入り込んでおり、この内海は、現在の印旛沼、霞ヶ浦と連なり、鹿島灘で大きく湾

口を開いていた。これを「古鬼怒湾」と呼ぶが、鬼怒川河道では下妻付近、常陸川は境町付近、飯沼川は古河付近まで入江が深く入り込んでいたことが、同様に貝塚の分布状況から分かっている。

「古鬼怒湾」は縄文海退後も浅い内海として存在し続けるため、弥生時代以降中世までのこの内海を便宜上「香取内海」と呼称することは先に述べた。以下、資料上登場する内海と呼称を紹介する。『常陸国風土記』の行方郡の条では、現在の西浦・北浦が「流海」と呼ばれていたことが分かる。文永6年（1269）に成立した『万葉集注釈』（仙覚抄）によると、風土記時代の「流海」は室町時代に「内の海」（内つ海、浪逆浦）と呼んだと言う。現在の香取市北佐原から稲敷市の旧東町地区を含む「内の海」の中心部は中世に「香取海」、「香取浦」と呼ばれた浅い海で、「鹿島流海」（北浦）、「香澄流海」（霞ヶ浦<西浦>）に続いていた。

また、『常陸国風土記』によると、香取海の西は「榎浦^{えのうら}」と呼ばれる内海であったという。榎浦は現在堆積土砂で埋まり、水田地帯となっている。榎浦の西、現在の龍ヶ崎市、利根町、河内町、印西市などにまたがる低地は、「葦原」のちに「谷原」と呼ばれ、谷原の西、現在の守谷市、柏市の間から菅生沼^{すがお}あたりまでの低地は「藪沼^{いぬま}」と呼ばれる細長い湿地帯であったと言う。

藪沼の上流（現坂東市周辺）は多くの池沼（現在は干拓されている）の落水を集める帯状の沼沢地帯で平安時代には「東の広河、広潟」、室町時代に「常陸川」（現在の利根川の河道）と呼ばれた。

弥生時代から古墳時代の「香取内海」の詳細は不明であるが、古代末には「香取海」の西に「榎浦」、さらに西に湿地帯である「葦原」があり、「葦原」付近で「藪沼」（利根川）、「手下水海」（手賀沼）、「印波浦」（印旛沼）が繋がっていたと推測できる。

ちなみに、「手下水海」は大治5（1130）年6月11日『下総権介平朝臣経繁寄進状』（櫟木文書）に登場する。平常重が相馬郡布施郷を伊勢神宮に寄進し相馬の御厨が成立するが、この時の南の範囲を志子多谷（篠籠田）、手下水海（手賀沼）としており、いずれも市域に残される古い地名の一つである。

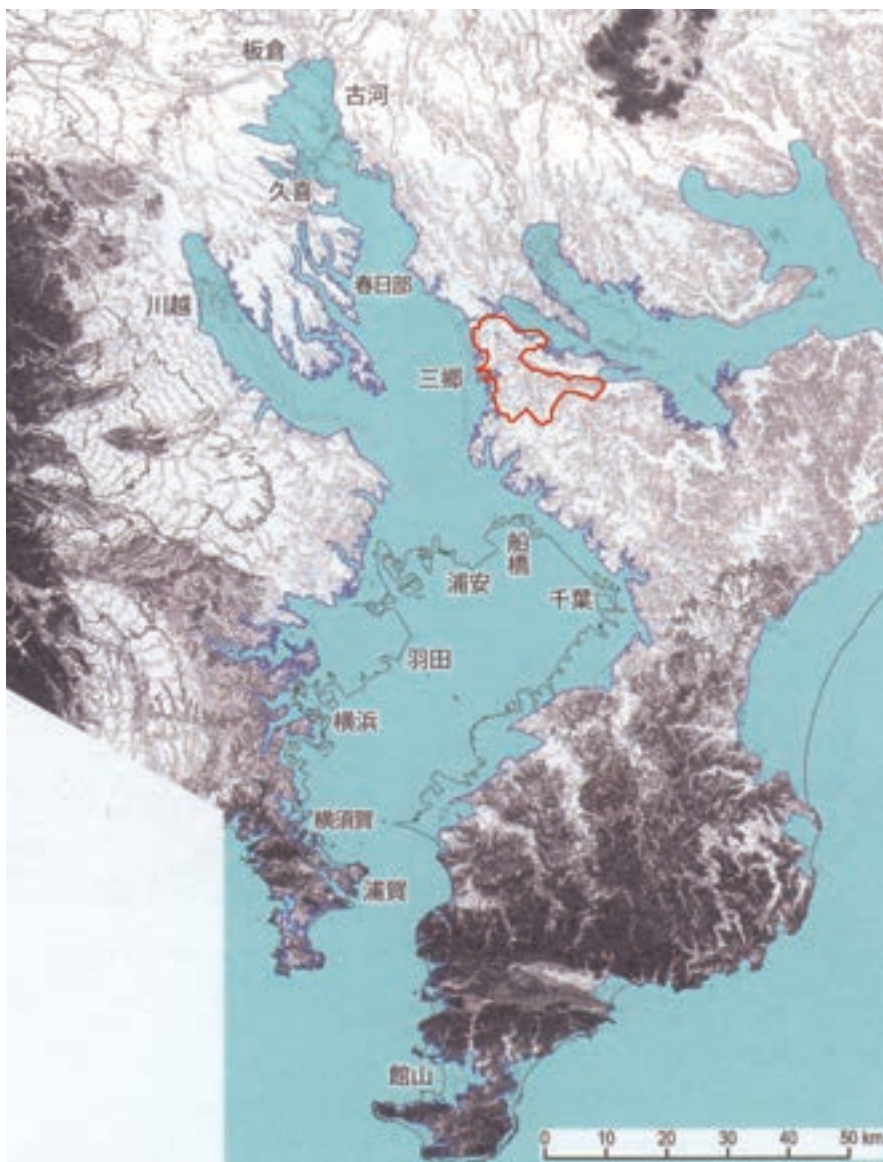


図1-15：遠藤邦彦他，令和4年（2022），『縄文海進—海と陸の変遷と人々の適応—』（富山房インターナショナル）図1「自然科学的手法で復元された縄文海進最盛期の海岸線」に柏市域を加筆

(2) 歴史概況 (各時代の年代は『柏市史 (原始古代中世 考古資料)』2018,『柏市史 (沼南町史 通史編)』2023 による。)

①原始

旧石器時代 (約 38,000 年前～ 16,000 年前)

豊かな動物資源

柏の地にはじめて人類が足を踏み入れたのは、今からおよそ 3 万 8 千年前である。

当時は寒冷な氷期であったため、当時の平均気温は 6℃前後で、現在より 7℃ほど低かったと言われている。これは現在でいうところの北海道東部に近い冷温帯気候だった。このような環境の中、自然に生息していた動物群は、ナウマンゾウやオオツノジカなどの中・大型哺乳動物が多かったようである。いずれも九州から北海道までの地域で化石が発見されている。

下野—北総回廊上の生物の移動

下総台地上に通っていた「下野—北総回廊」に広がる広大な草原は野生動物の宝庫であり、これらの動物たちは、この自然道を南北に行き来していたと思われる。この動物を追って旧石器時代のハンターたちは頻りに柏を訪れていたことが、発掘調査によって明らかとなっている。全国の石器時代遺跡約 1 万か所の 1 割に及ぶ遺跡数が下総台地上にあり、豊かな動物資源を追っていかに多くのハンターたちが柏の地を訪れていたかが分かる。

下野—北総回廊上のモノの伝搬

また、遺跡から出土する石器の石材を調べると、北関東や東北で産出する石材がみられ、これらの石材もこの自然道を通して搬入されたと考えられている。

柏の旧石器時代は「下野—北総回廊」に生息した豊かな動物資源をめぐり、ヒトとモノが行き交っていた時代であると言える。



図 1-16：キャンプのようす
(八街市郷土資料館 提供)

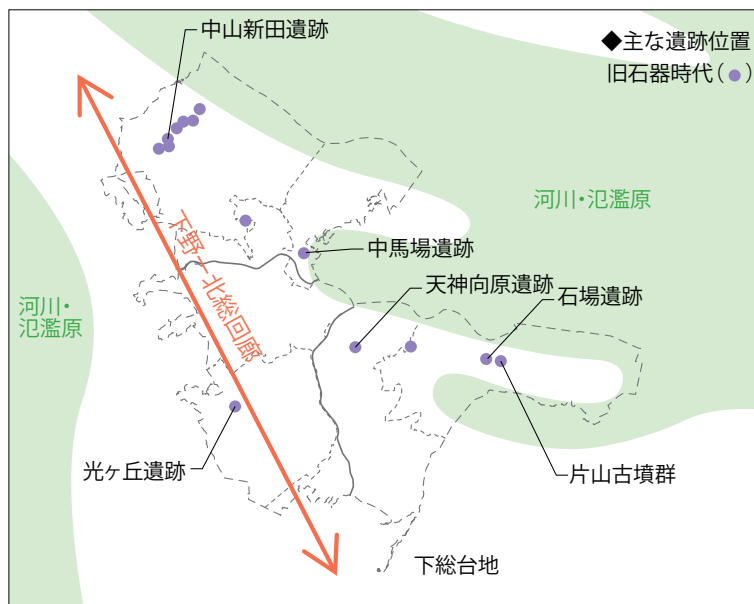


図 1-17：原始 旧石器時代



写真 1-13：ナウマンゾウ
(野尻湖ナウマンゾウ博物館 提供)



写真 1-14：石場遺跡出土石器
(千葉県教育委員会 提供)

奥東京湾，古鬼怒湾の豊かな資源

全国 2,400 か所の縄文貝塚の半数以上が関東地方に集中しており，千葉県貝塚数約 700 か所は全国の 3 割近くを占める。世界的にみても，規模や密度，出土資料の豊かさにおいて千葉貝塚に比肩すべき地域は存在しないと言われるが，これを支えたのが「奥東京湾」，「古鬼怒湾」という 2 つの大きな内海の存在である。

内海が発達して海産資源が活発に利用されるようになったのは，今から約 7,000 年前の縄文時代早期の後葉である。前期には東葛・葛南地区に貝塚が集中することから，この時期の文化の中心地であったと言える。

集落の形成，共同体による定住化

中期（約 5,000 年前）になると，千葉湾岸エリアに特別史跡加曽利貝塚に代表される大型の貝塚が一斉にできる。環状集落と呼ばれる大きな集落でもあり，それまで比較的小さな単位で移動の多い生活をしてきた人々がいくつか集まって，通年定住型の集落をつくり，新しい共同体を築いたのである。

市域では大型貝塚は見られないが，近年これと同規模の貝塚を持たない環状集落が確認され，注目されている。柏たなか駅周辺の大室小山台遺跡・大松遺跡，柏インター周辺の出山遺跡において貝塚を持たない大集落が確認されたのである。市域においても，この頃に定住を可能とする生活様式が確立したのであろう。発掘調査で確認された集落の大きさから，この頃に下総台地と古鬼怒湾の森林資源や動物資源に最も恵まれたのであろうと想像できる。

一年を通して豊かな動植物資源を享受できる柏に人々が集まり，花開いた縄文文化は，当時の一大中心地とも言うべき様相を見せている。

後期（約 4,000 年前）には手賀沼の南岸に上根郷遺跡，大井貝塚，岩井貝塚という 3 つの貝塚を持つムラが営まれ，「古鬼怒湾」の広域に形成された大規模なネットワーク社会の一角となった。縄文時代晩期（約 3,000 年前～ 2,600 年前）には県内全域でムラが少なくなった。



写真 1-15：大松遺跡出土土器
(千葉県教育委員会 提供)

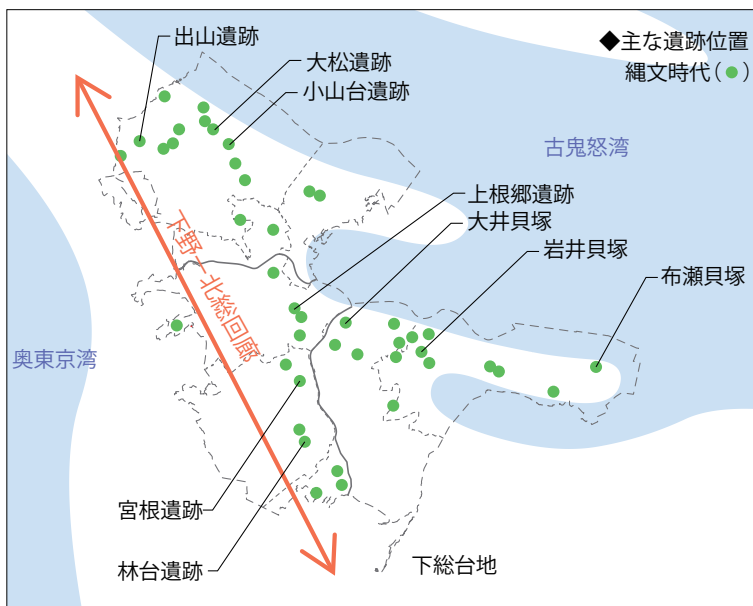


図 1-18：原始 縄文時代



写真 1-16：小山台遺跡出土玉類
(千葉県教育委員会 提供)

香取内海をめぐる地域圏の形成

縄文時代晩期以降、しばらく市域に人々の生活の痕跡は見出せなくなる。弥生時代後期、谷津に臨む台地上に数軒から 10 軒程度の住居で構成されるムラが見られるようになる。また、これらのムラから出土する土器は、香取内海を中心に分布する縄文を多用する土器群であることから、この頃に香取内海をめぐる地域圏が形成されたと考えられている。この集落のあり方、使用された土器などは、上総地域とは全く様相を異にする。

小規模なムラが希薄に点在する在り方や出土する土器は、北に隣接する茨城県と似た特徴を持っており、このことは、後期に入り「香取内海」を中心とした地域のまとまりが成立したことを意味し、このようなムラの形態は古墳時代出現期直前まで続く。

他地域や畿内政権の影響

弥生時代後期後半頃から、房総半島で発掘された集落では、伊勢湾周辺の影響を強く受けた土器群や、さらに西方の近畿地方・北陸地方の特徴をもつ外来系の土器群が出土するようになる。この現象の背景として、当時、畿内地方とその周辺部で起こった倭国大乱に端を発し、畿内を中心とする大和王権が成立する過程において起きた勢力再編等の動きが関係したと言われる。

この時、西からの影響を強く受けたのは、東京湾沿岸の主要河川流域である。この影響はさらに「香取内海」南岸まで波及し、柏地区の戸張一番割遺跡や戸張城山遺跡、山田台遺跡、手賀地区の北ノ作 1・2 号墳（千葉県指定史跡）から外来系の土器が出土している。これらの遺跡は、「香取内海」の要衝に位置し、「香取内海」北岸とは一線を画すようになる。

このように、古墳時代出現期から古墳時代前期にかけて、国内の勢力再編の影響を受けて、市域の集落のあり方や出土する土器の様相は一辺するが、一方で古墳時代中期の古墳である弁天古墳から出土した石枕・立花は「香取内海」をめぐる地域圏で分布する。国内の大きなうねりを受けながら、地域によって文物の受容の仕方も多様であったと思われる。



写真 1-17：花野井大塚古墳出土短甲

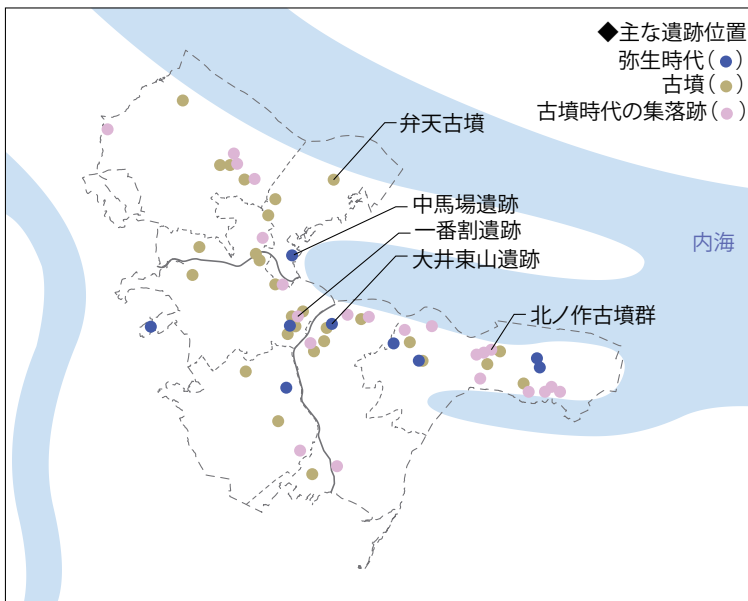


図 1-19：原始 弥生～古墳時代



写真 1-18：花野井大塚古墳出土鶏形埴輪

また、中期の古墳の調査例が多いことも市域の特徴である。田中地区の花野井大塚古墳では短甲をはじめとし豊富な副葬品と鶏型埴輪が出土している。前方後円墳（墳丘長 35 m）である富勢地区の弁天古墳からは「香取内海」を分布域とする石枕と立花（柏市指定文化財）が出土している。

一方で後期（西暦 6 世紀頃）の古墳は一般的には多数を占めるが、市域では少数で大型古墳の分布も見られていない。これに対し、風早地区の大井東山遺跡や富勢地区の中馬場遺跡のように古墳時代後期～奈良・平安時代まで継続的に営まれる大集落跡があることも市域の特徴と言える。

②古代

奈良・平安時代（710 年～ 1185 年）

律令国家の成立と東海道の整備、^{あかねつ}茜津駅の設置

律令制度のもと国家は、全国を国・郡（評）・郷（里）という地域に分けて治め、国には国府、郡には郡衙と呼ばれる役所を置き、統治を担った。また、国を仏教によって護ろうと中央に東大寺、地方に国分寺、国分尼寺を建てた。現在の本市は下総国相馬郡、葛飾郡に属していた。奈良正倉院所蔵の天平 17 年（745）の調・庸布には「下総国相馬郡大井郷、戸主、矢作部麻呂…」という人物が記されており、「大井郷」の歴史の古さを示す資料となっている。

集落の分布は古墳時代後期以降、その分布が引き継がれる傾向にある。下総国は、常陸国とともに東国における軍団政策の拠点の役割を果たした。当時朝廷に従っていなかった東北～北海道に住む人々である蝦夷との交戦が長期化するなか、^{えみし}陸奥国への兵士の移動や物資輸送の需要が増し、迅速性が求められたことから、宝亀 2 年（771）東海道の経路が変更された。それまで下総国府・井上駅から上総国府を経由して常陸国へ至る経路をとっていたが、延暦 24 年（805）に井上駅から北上して市域（富勢地区中馬場遺跡を茜津駅とする説もある）を経由して、常陸国府（茨城県石岡市）－陸奥国へと達する経路と変更されている。

茜津駅の推定地とされる^{なかばば}中馬場遺跡では、このことに呼応するように 9 世紀代を中心として集落の最盛期を迎える。市域の集落跡も概ねこの頃にピークを迎える傾向にある。また、中・近世には「香取内海」沿いに、多くの津（港）が存在し、水上交通が盛んであった。古代においてもこのような「津」は存在したと想定され、茜津の駅家名にも「津」の文字が入っていることから、茜津駅が単に陸上交通としてだけでなく、水上交通によっても結ばれていたことを示すと考えられている。

仏教の伝来、庶民への浸透

古墳時代後期に古墳の分布が希薄な状況を反映するように、村落寺院を含めた古代寺院の分布も他地域に比較して希薄である。手賀廃寺では軒先瓦（9 世紀）が出土している。風早地区の大井東山遺跡では内陣建物の仏堂が確認され、「新生寺」の銘文を持つ墨書土器が出土したことから、集落内の小さな村落寺院であると考えられている。



写真 1-19：手賀廃寺表採軒丸瓦

治安の悪化と平将門の台頭

8 世紀末から 9 世紀にかけて軍団が廃止されると、地域の治安は悪化し「群盗」の横行が常態化するようになる。「^{しゅうば}儼馬」は、これらの群盗に対抗するために武装し、また、自らも他の儼馬を襲い強奪をするようになる。また、東北地方から移住させられた「^{ふしゅう}俘囚」も、しばしば群盗の一員となり反乱を起こした。

このような中で、9 世紀末から 10 世紀初め頃、治安回復のため上総介として赴任したのが、桓武天皇の曾孫で桓武平氏の祖と

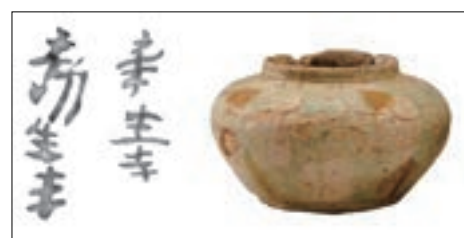


写真 1-20：大井東山遺跡出土三彩陶器と「新生寺」墨書
(千葉県教育委員会 提供)

なった高望王である。彼の孫にあたるのが、坂東を一時制圧し、自ら「新皇」と称した平将門である。平将門の乱の経過を示す資料『将門記』には将門が訪れた土地が記されており、「相馬郡大井津を以て号して京の大津と為さん」とある。この大井は本市の大井とする説が有力で、市域が平将門の影響下にあったとすることができる。

9世紀頃から在京し任地へ赴かない遥任^{ようにん}の国守が広範に見られるようになると、国の政務は在国の上席の国司に集中していく。彼らはいつしか「受領^{ずりよう}」と呼ばれるようになり、10世紀以降、律令制支配の崩壊に対応するため、

国司制度が変更されると、郡司層以下の有していた権限を手に入れることとなり、国司が国内での徴税を請け負う体制が成立する。受領は、国内での徴税額と中央への上納額の差額を取得して莫大な収入を得ることになり、厳しい徴税をおこなったため、郡司・農民らの激しい抵抗を生み出した。

『将門記』には「稲束を田に敷きつめて人馬が渡った」とか「幾千の人家を焼いた」など、戦乱の激しかった様子が記されており、各地に伝説が残された。市域では、10世紀半ばから14世紀頃までの台地上の集落の痕跡は少ないが、この原因として『将門記』に描かれた戦乱の影響があったのかもしれない。この他、新たな水田開発のために集落が低地に移動した可能性も指摘される。

香取内海周辺を舞台とする平将門の伝説

将門の乱は私戦から始まったが、短期間のうちに坂東を制すると、自ら「新皇」と称し、公然と朝廷に反旗をひるがえすまでになる。朝廷側からすると反逆者の将門も、その後の東国武士団や地域にとっては英雄であった。将門は押領使の藤原秀郷らによってあっけなく滅ぼされ、将門の独立政権はわずか3ヶ月しか存続しなかったが、将門伝説は千葉県北部から茨城県南部にかけて数多く残されており、その影響の大きさを物語っている。

市域には、手賀地区の岩井に将門を祀る将門神社が残されており、地域では今でも、将門を裏切った愛妾桔梗御前を疎んで桔梗を植えず、また将門の調伏を祈った成田山には詣でないという。このほか、風早地区の大井字井堀内の畑の中の静かな繁みは、通称「妙見さま」と呼ばれる風早地区福満寺の境外地で、中には市指定文化財の「車ノ前五輪塔^{くるまのまへごりんとう}」が立っている。伝承では、将門が戦死したのち、愛妾の車の前がこの地に隠れ、尼となって妙見堂を建て将門の菩提を弔ったとされる。お堂の存在は不明であるが、井堀内の人々は将門の命日2月21日には、例年「妙見講」をおこなってきた。また、福満寺の境内には、車の前が顔を映したという「鏡の井戸」という古井戸が今も残されている。また、布施地区の布施弁天東海寺には「伝 将門と弁天図絵馬」がある。

相馬御厨^{そうまのみくりや}の誕生と土地開発

将門の乱のあと、相馬郡は将門の叔父・平良文の領地となり、代々その子孫が受け継いでいる。千葉氏の祖とされる平良文は香取郡東庄町の太友城に館を構えたが、12世紀に常兼の代に大椎城^{おおじょう}（千葉市）へ拠点を移したと伝えられる。常兼の子常重は千葉城に拠点を移し千葉介常重と称し勢力を伸ばした。常重は大治5年（1130）、相馬郡布施郷（我孫子市と取手市を中心としたあたり）を伊勢神宮に寄進すると、「相馬御厨」が成立する。常重の子が千葉氏の中興の祖、常胤である。

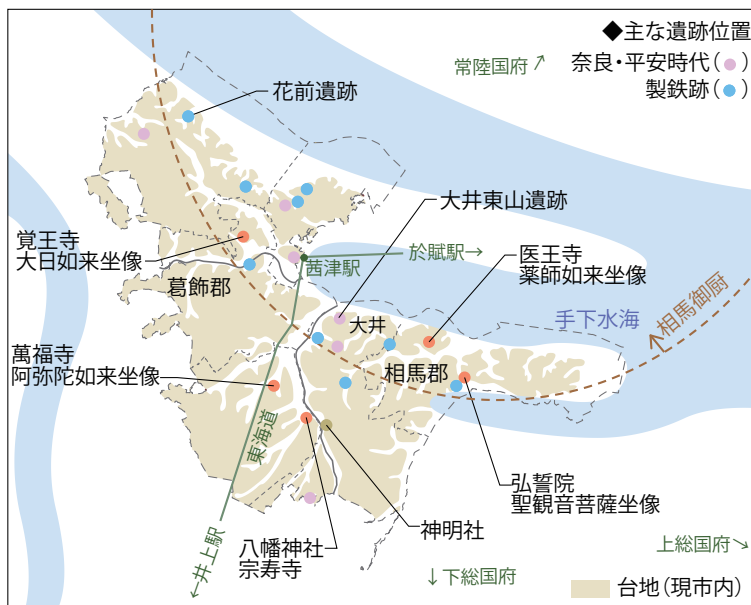


図 1-20：古代 奈良・平安時代

③中世

鎌倉時代～室町時代（南北朝時代・戦国時代）（1185年～1603年）

「湖沼の荘園」相馬御厨

鎌倉幕府草創期に源頼朝を支援したことから、幕府の有力御家人となった千葉常胤は多くの領地を得る。その後、常胤の二男の千葉師常（初代中世相馬氏）が相馬御厨一体を支配した。

御厨の領域内には手賀水海（手賀沼）、衣川（鬼怒川）、藺沼（現利根川）が含まれていた。市域は里山・里海と河海をめぐる水上交通を中心として形成されており、相馬御厨が典型的な「湖沼の荘園」と言われる所以である。

市域を支配した将門も相馬氏も騎馬武者の象徴とされるが、実は海の武士としての側面も強くもっており、古代末から中世の東国武士団にとって、内海への存在は重要な基盤であったと思われる。

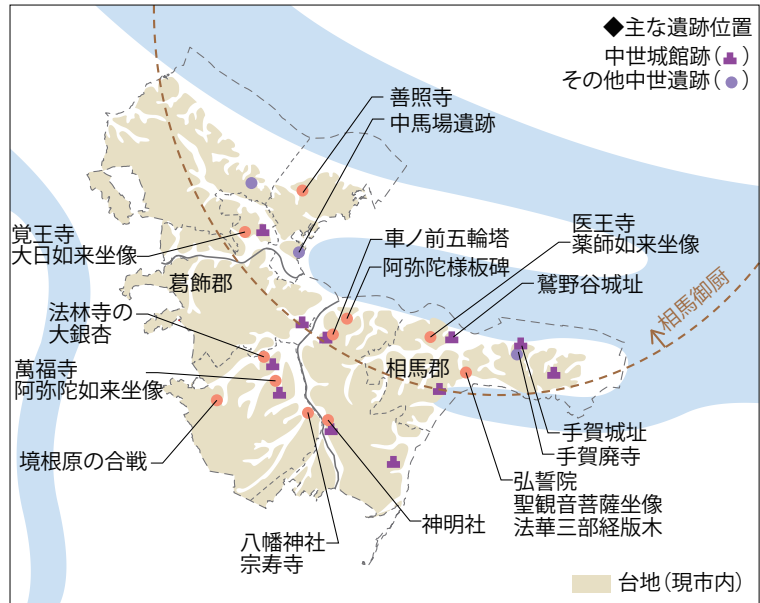


図 1-21：古代末～中世

中世に遡る社寺や地名

土地区増尾の萬福寺には、平安末期に作られたという千葉県指定文化財である阿弥陀如来坐像が祀られているほか、相馬氏が代々信仰している守り神である妙見様を祀るお堂がある。このほか、本市に伝わる鎌倉時代の寺社として知られているのは、土地区藤心の八幡神社、宗寿寺、富勢地区布施の善照寺などがある。このころの文書を見ると次のような村が名を連ねている。「わしのやむら」「みのわむら」「いつみのむら」「おほ井のむら」「ますおのむら」「たかやなきのむら」「ふちかやのむら」これらはいずれも相馬氏が支配していた。また、塚崎に鎮座する神明社は、伊勢神宮の各地の御厨に分祀社されたもので、社碑によれば鎌倉時代末の創建とされている。現在の本殿は棟札銘から建築年は享保 18 年（1733）で、伊勢神宮の方向を向けて建てられているという。

相馬氏の衰退

南北朝時代、奥州相馬氏（福島県南相馬市）は北朝にくみし、下総国に残った下総相馬氏は南朝に属している。奥州相馬氏は、江戸時代を通じて相馬中村藩主として存続したが、下総相馬氏は豊臣秀吉の小田原攻撃によって打撃を受け、わずかに残った一族は徳川幕府に仕えて旗本となり、さらには小田原藩（大久保家）に仕えるもの、帰農するものなど対応が分かれることとなる。

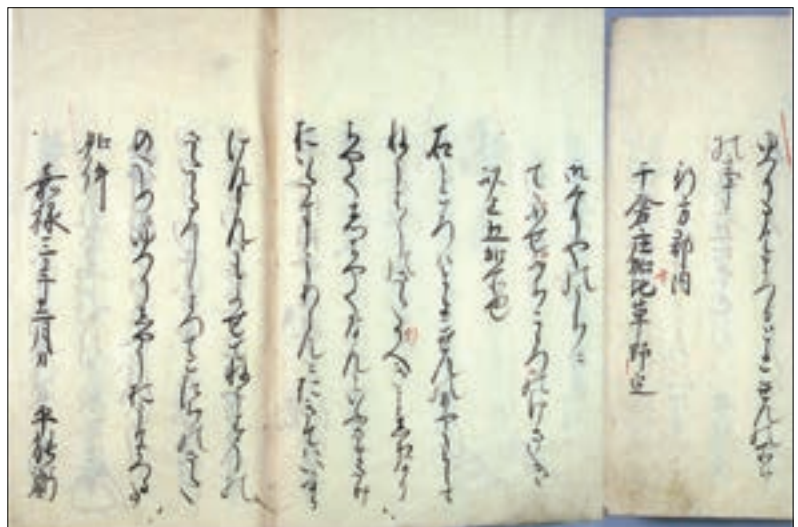


写真 1-21：相馬能胤讓状案（群馬県立歴史博物館 提供）

戦乱のはじまりと平和への祈り

室町時代、足利尊氏を将軍とする室町幕府が京都に開かれると、鎌倉には関東を管轄する鎌倉府が置かれる。しかし、鎌倉府の長官鎌倉公方足利氏とその補佐役関東管領上杉氏はそれぞれが関東の諸領主を配下に置いたため対立し、応永23年(1416)上杉禅秀の乱、永享10年(1438)永享の乱、永享12年(1440)結城合戦を経て、享徳3年(1454)鎌倉公方足利成氏は関東管領上杉氏を暗殺し、鎌倉から古河へ本拠を移して古河公方を名乗り、上杉氏方の幕府も関東の諸領主も巻き込み関東を二分する断続的な戦乱「享徳の乱」(享徳3年(1454)～文明14年(1482))となる。房総でも千葉家内部の争いで享徳4年(1455)宗家が代わり、関東東部は古河公方影響下に入るが、他国から安房国に里見氏、上総国に武田氏が入る等、様相が一変していく。

16世紀代には小田原北条氏が関東領国化を進め、関東管領職を継承した越後の上杉謙信、信濃国(長野県)・上野国(群馬県)に進出した甲斐武田氏、安房国里見氏らによる戦国大名の抗争の時代に入り、千葉市内に新たな公方(小弓公方)が招かれるほか、多くの分家に分かれた千葉氏一族をはじめとした房総の諸領主も巻き込まれる。

この頃市域では、享徳5年(1456)の「市川合戦」で、柏地区高田城の「^{そうき}匠塙新兵衛妙新」や戸張城の「戸張中台孫三郎妙台」などの有力者21人もの戦死者を出す。これらの内乱の幕引きとなるのが、文明10年(1478)12月、かねてから対立関係にあった武蔵国の太田道灌が下総国の千葉孝胤を排斥すべく、下総へ侵攻し境根原(土地区光ヶ丘周辺)で繰り広げた「^{そうき}酒井根合戦」である。ここでも高田城の「^{そうき}匠塙勘解由殿」が戦死する。この時の戦死者の首と胴を葬ったといわれる首塚と胴塚(光ヶ丘塚群)が光ヶ丘団地の公園内に残されている。

15世紀中頃から16世紀にかけては、手賀沼や大津川、大堀川、手賀沼などに面する交通の要所に多くの城館跡が築かれるようになるが、一連の争乱に関連するとみられる。現存する代表的な城跡に、土地区にある幸谷城館跡(きつね山歴史公園)、増尾城跡(増尾城址公園)、柏地区の松ヶ崎城跡がある。土取りにより消滅してしまった手賀城は、小金城(松戸市大谷口)とともに千葉氏の重臣であった手賀原氏の拠点として使用された。また、手賀地区には手賀原氏の墓所が今も残っている。

その後、出自は不詳ながら高城氏が小金城を本拠地とし、小田原北条氏と結んで東葛地方最大の領主となるが、この時、手賀地区の鷲野谷城はその支配領域の東端であった。実際に鷲野谷で力を持っていたのは染谷氏などの地侍(土豪)で、高城氏の家臣として普段は農業を営み、戦時には馳せ参じた。

天正18年(1590)、豊臣秀吉方は、関東の西半分程まで勢力を拡大してきた北条氏を攻めるが、房総では安房国から上総国南部を勢力下に置く里見氏以外、高城氏をはじめ千葉・原氏など房総北部の諸氏は北条氏領国に組み込まれ小田原城籠城に参加したため、小田原落城後の地元の城々も秀吉方の別働隊によって殆ど無血開城となった。小金城も豊臣方に落とされ高城胤則は敗軍の将となる。

鷲野谷の染谷家には、このような状況のもと高城氏から染谷氏へあてた書状が残されている。書状には家臣たちを思いやり、気遣う心情が綴られており、家臣たちは武士の身分を捨て農民として近世の村で中心的な役割を果たしていくこととなる。その後、江戸時代を通し名主として村役人を務めた染谷氏の居宅である染谷家住宅は国登録有形文化財に登録されている。

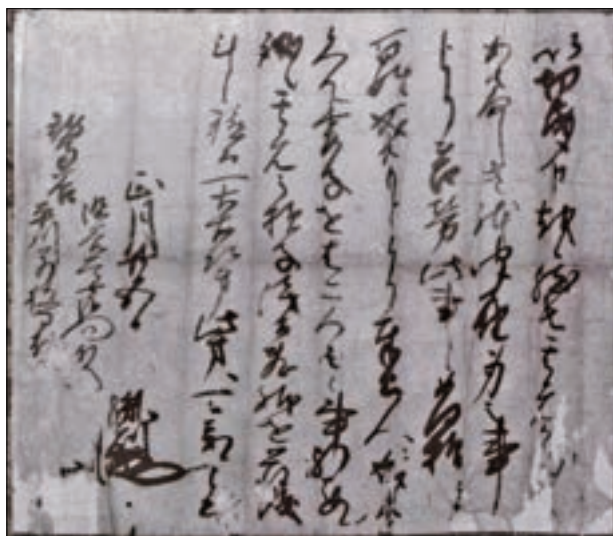


写真 1-22：高城胤則書状

④近世

江戸時代（1603年～1868年）

碁石まじりの土地支配

徳川家康が征夷大将軍となり江戸に幕府が開かれると、江戸に近い柏には徳川家の重臣であった本多正重が配され、幕府直轄の牧が設置されるなど江戸を守る役割を果たした。本市北西部に昭和前期までであった田中村は本多氏の所領が駿河国田中藩にあったことに由来する。本多氏は本市を中心とする下総地域にも飛地領を持ち、船戸村と藤心村にそれぞれ代官所（船戸代官跡、藤心陣屋跡）を設置してここを治めていた。市域は本多氏の領地のほか、さまざまな旗本や御家人の領地となっており、この様子は「碁石まじり」と呼ばれていた。

幕府の道路整備と水運の整備

幕府は財政基盤である年貢米を江戸や大坂に集めるため、五街道を含めた道路整備と内陸水運の整備を急速に進めはじめる。市域では江戸と徳川御三家の城下町水戸を結ぶ水戸道中（現「旧水戸街道」）が整備された。市域は小金宿と我孫子宿の間にあたる通過点であったが、当時の絵図には街道沿いに松並木が描かれており、昭和30年代（1955～64）ごろまではその松並木をみることができた。この一環として幕府は利根川東遷事業に着手し、利根川の水路を常陸川に通じて銚子で鹿島灘に流すことを計画した。この事業により、古利根川による水害から江戸を守り、関東地方東部との舟運を開くとともに、古利根川流域の農地開発を推進し、江戸の防御制を高めようとしたのである。



写真 1-23: 水戸街道の松並木（昭和37年（1962）頃）

また、幕府は元和2年（1616）関東の渡船場16か所を定船場と定め、関所としての機能も持たせるが、この時布施の七里ヶ渡も定船場として定められた。

利根川舟運の発展と河岸のにぎわい

江戸時代中期以降、経済の発展により幕府・諸藩の年貢米のほか商人荷物の輸送が増え、江戸と地方、地方と地方が結ばれた利根川舟運が、物資流通の大動脈となるとともに、寺社参詣の人々の交通手段としても利用され大いに発達した。

市域ではこの利根川水運に関連し、富勢地区の七里ヶ渡・布施河岸、柏地区の戸張河岸・呼塚河岸などが知られる。江戸への物資は、河岸で陸揚げされたのち、鮮魚街道やうなぎ道を松戸や流山まで駄走させ、また江戸川で船に積み替え江戸へ運ばれたが、物資を中継する河岸場として賑わったことも市域の特徴と言える。特に関東三大弁天と言われる布施弁天東海寺（東海寺本堂・楼門・鐘楼＜県指定文化財＞）のある布施の街道沿いは、一時期、成田山より賑わったと言われている。市域には藤ヶ谷にある鮮魚街道常夜燈

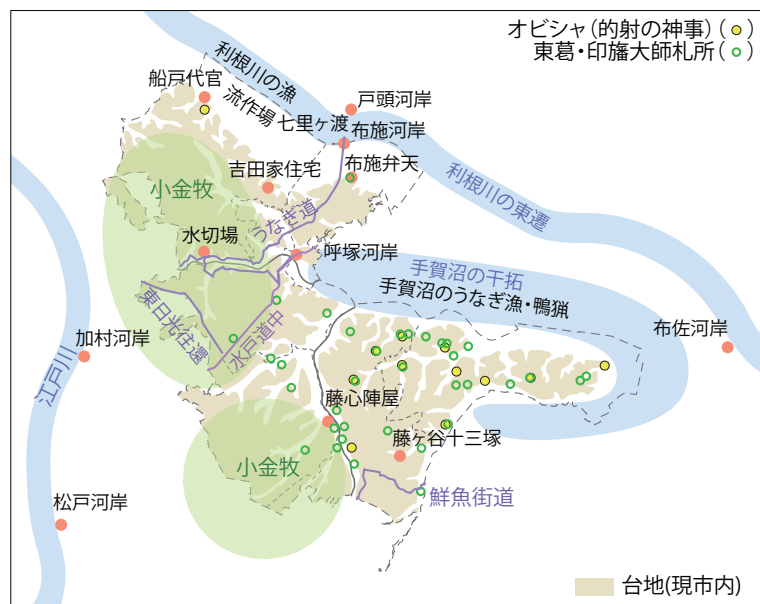


図 1-22: 近世

(市指定文化財)、布施常夜燈、呼塚常夜燈が今も残っている。また、布施には江戸創業の橋本旅館(昭和初期建築)があり、昭和30年代に廃業していたが、近年古民家カフェとして再生している。

利根川の治水利水、水害との闘い

しかし、承応3年(1654)の東遷事業後間もなく上流から運ばれた砂泥による浅瀬が現れ、渇水期に通航障害が見られるようになる。以降、利根川舟運は渇水期には浅瀬との戦い、大雨や台風時は水害との戦いの日々となる。

江戸への食材の生産と流通

市域でとれた鶏卵や野菜などや、手賀沼で獲れたうなぎや雑魚、鴨などは、江戸に運ばれ、江戸の台所を潤していた。特に、手賀沼のうなぎは「あお」というブランド品として、また、手賀沼で獲れたつがいの鴨とともに戦後すぐまで高級贈答品として江戸・東京で珍重されたようである。

観光、人々の旅行の発展

手賀沼は布施弁天東海寺とともに身近な観光地としても知られていたようで、木下から出た遊覧船「木下茶船」のコースの一部にもなっていた。さらに、東葛印旛大師をはじめとし、多くの霊場があり近在の人々の信仰と楽しみを兼ねた、主に地域の人々が訪れる旅行圏が市域に成立していたようである。

手賀沼の新田開発

江戸の近傍にあり、観光地としても知られた手賀沼は江戸商人たちの新田開発の意欲もかきたて、江戸初期に海鮮問屋の江戸商人たちによって開墾にされる。しかし、手賀沼は利根川が増水すると排水困難となり内水氾濫に襲われるため、たびたび大洪水に見舞われ、商人たちは撤退した。享保年間に幕府は沼に千間堤を築いて開墾したとされるが、これもうまく機能せず、近代以降も排水の問題を解決できなかったようである。最終的に利根川に機械排水することでようやく昭和40年代(1965～74)に干拓を終えた頃には、皮肉にも減反政策がはじまる頃であった。

小金牧と水戸家鷹場の管理と開発

下総国には古代から牧が所在したとされる。近世になると幕府直轄の小金牧(高田台牧、上野牧、中野牧、下野牧、印西牧)が開かれるが、市域には高田台牧、上野牧、中野牧が所在し、南柏の松ヶ丘特別緑地には耕地と牧の境に築かれた野馬土手が住宅街の中に良好に残されている。また、市域の一部は水戸家鷹場となっており、水戸家はたびたび鷹狩りを実施している。この維持管理に村々には鷹場負担が課せられていた。

牧は、野馬奉行(綿貫家・松戸市)のもと現地での牧の管理・運営を牧士が担った。牧士は士分格で名字帯刀、乗馬、鉄砲所持が許されており、市域では花野井吉田家、松ヶ崎芳野家、名戸ヶ谷木村家はその任にあっている。花野井吉田家の長屋門や主屋などの建物は現在、国重要文化財に指定され、旧吉田家住宅歴史公園として一般公開されている。これら市内の名主層の家々には長屋門が建てられており、市域の景観の特徴となっている。

低平で広大な下総台地に展開した小金牧の存在は、ややもすると柏市には歴史がないと言われる元凶となっているが、これまで述べてきた通り、近世以前にも連綿と祖先たちが残してきた文化遺産が市域には所在する上に、小金牧は近代から現代へかけての開墾、軍郷都市、商業都市として発展していく礎となるのである。



写真 1-24：手賀沼絵図(宝永元年(1704))

千葉県誕生と小金牧の開墾

江戸開城後、明治政府は暫定的に下総野鎮撫府、次に下総知県事に市域を治めさせていたが、明治2年（1869）に葛飾県、明治4年（1871）に印旛県、明治6年（1873）に千葉県が設置されている。明治8年（1875）に新治県が廃止となり香取・海上・匝瑳の三郡が千葉県へ編入され、千葉県管下にあった猿島以下四郡と葛飾・相馬両郡の一部が茨城・埼玉に管轄替えとなり、現在の千葉県の範囲となる。このことは、香取の海を取り巻く相馬の御厨の範囲や文化圏が、利根川東遷によって分断され、新しい文化圏となっていったことを示しているのかもしれない。

明治維新となり、政府は開墾を決定すると東京府を取締方に命じ、開墾会社を設立させると、東京府下の東京窮民を農業に従事させることとした。明治2年（1869）より小金牧の開墾に手をつけ、入植者の募集を開始している。入植地の開墾地名には番号が組み合わされており、市域にある地名には「豊四季」「十余二」がある。開墾は土地の権利の問題、凶作や自然災害などにより困難を極め、開墾会社は清算へとむかっている。開拓民たちの志は、高田台牧、上野牧にそれぞれ残る開墾碑に今も残されている。

明治22年（1889）、明治の大合併により8つの村（豊四季村・十余二村・富勢村・土村・田中村・千代田村・手賀村・風早村）が誕生した。

利根運河の建設と周辺の賑わい

江戸時代中期以降、物資輸送や寺社参詣の人々を運ぶ大動脈であった利根川舟運は、明治23年（1890）には利根運河が完成するなど近代化が図られ、それまでの和船や筏のほかに汽船や発動機船が就航するようになった。今となっては想像がつかないが、利根川東遷事業以降、昭和初期まで利根川や利根運河には高瀬舟や蒸気船が行き交う光景が見られた。運河完成と同時に植えられた桜は「運河の桜」とよばれ、運河を行き交う船の中では、花見の酒宴が催された。地域には運河霊場八十八ヶ所もつくられ、物資の流通や観光客で運河周辺は活況を呈した。

鉄道の開通、道路網の発展と水運の衰退

一方、明治29年（1896）には常磐線（当時の日本鉄道株式会社土浦線）の田端―土浦間が開通し、柏駅が設置された。さらに、明治44年（1911）東武野田線（当時の県営鉄道野田線）柏―野田市間も開通し、陸上交通の要衝として柏駅周辺が発展していくきっかけとなる。やがて、鉄道輸送が物資輸送の主力となっていくと、度重なる自然災害も相まって、利根川舟運は終焉を迎えていく。



写真 1-25：開墾碑（四号稻荷神社）



写真 1-26：利根運河を運行する外輪船（大正4年（1915））

たび重なる自然災害（水害）

水運の衰退に追い打ちをかけたのが、たび重なる自然災害であった。洪水のたびに流れ込む土砂の浚渫は経営を圧迫し続け、昭和16年（1941）の台風による大洪水で水堰が決壊し壊滅的な打撃を受けると、利根運河はその短い歴史に幕を下ろすこととなる。

キリスト教の解禁と手賀教会の設立

明治6年（1873）に明治政府によってキリスト教が解禁されると、明治12年（1875）に手賀村周辺の有力者らはキリスト教への入信を決意し手賀教会を設立し、明治14年（1881）に近隣の民家を現在の場所へ移築し教会堂とした（県指定文化財「旧手賀教会堂」）。旧手賀教会堂は現存する日本で唯一の茅葺き民家転用教会堂で、首都圏で現存する教会堂としては最古のものである。また、教会としての機能を移転した、別の場所にある教会堂には聖画（県指定文化財）が掲げられている。この聖画は、明治期の女流作家として高い評価を受ける山下りん（茨城県笠間市出身）が描いたものである。



写真 1-27：柏駅に停車中の SL
（昭和13年（1938）頃）

大正時代（1912～1926年）

柏駅の誕生と周辺の町場化

大正3年（1914）、千代田村・豊四季村組合、田中村・豊四季村組合がそれぞれ組合を解消し、千代田村、田中村となる。大正8年（1919）に水戸街道（陸前浜街道）が国道6号線となり、同12年（1923）には東武野田線（当時の北総鉄道株式会社）の柏—船橋間が開通すると、柏駅周辺は陸上交通の葛飾郡北部の拠点として急速に発展を遂げ始める。



写真 1-28：柏競馬場（昭和10年（1935）頃）

同15年（1926）には千代田村が町制を施行し柏町となるが、町名に旧村名ではなく駅名が採用されたことは、当時の柏駅周辺の劇的な変貌を象徴する出来事といえる。

昭和時代（戦前）（1926～1945年）

大レジャーランド構想「関東の宝塚」

昭和初期に入り、ますます市域は町場化していくが、当時日本を襲った不況が長期化し、地域の課題は「町おこし」であった。花野井の吉田甚左衛門は、大阪近郊の小浜村（宝塚市）が宝塚歌劇団などにより大きな発展を遂げていたことに目をつけ、東京市民に娯楽の場を提供することにより、柏町を「関東の宝塚」にしようとする構想を提示する。現在の豊四季台団地一帯にあった柏競馬場と柏ゴルフ場がそれで、柏競馬場は当時関東一の規模を誇り、1日2～3万人の観客を集める賑わいであったという。

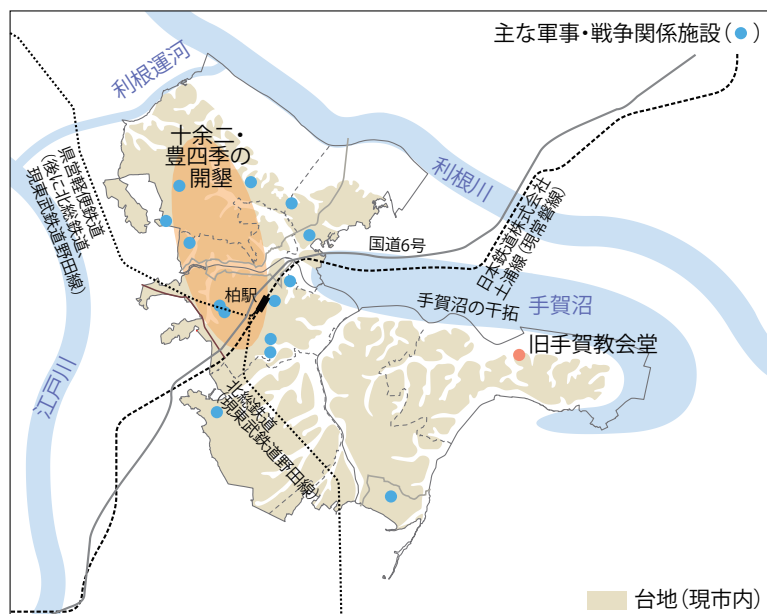


図 1-23：近代

レジャーランドから軍郷都市へ

吉田のこの大レジャーランド構想は、時局の悪化により「関東の宝塚」から「軍郷都市柏」への変化を余儀なくされる。柏ゴルフ場跡地には、日本光学（株）の軍需工場が、武蔵野カンツリー倶楽部藤ヶ谷コース跡地には陸軍藤ヶ谷飛行場が建設されたことは、戦況悪化時の柏の状況をまさに物語っている。

昭和12年（1937）に陸軍柏飛行場の建設が田中村に決まり、翌年富勢村根戸に高射砲第二連隊が移駐してきたことをきっかけに、市域には次々と軍事施設が進出してきた。憲兵隊柏分遣所、航空廠立川支廠柏分廠、第4航空教育隊（東部102部隊）、柏陸軍病院（現市立柏病院）などがそれで、柏飛行場の掩体壕・秋水燃料庫、高射砲第二連隊の照空予習室・営門・歩哨舎は現在も残されている。昭和20年（1945）8月には、市域の全部隊の推定兵員数は1万人を超えていたと考えられており、当時の柏町の住民人口がおよそ1万5,000人であったことから、まさに軍郷都市であった。また、戦争が激化すると、日立製作所柏工場や東京機器柏工場などの軍需工場が柏に進出し、操業が開始されると、柏駅は兵隊や軍需工場の工員で混雑したと言われる。

⑥現代

昭和時代（戦後）～現在（1945～2023年）

戦後の開墾・開拓

戦後の深刻な食糧不足を解消するため、昭和20年（1945）政府は農林省に開拓局を新設し緊急開拓事業を実施する。市域では「利根川沿いの田中遊水地」「高野台の高射砲連隊跡地」「柏飛行場・第四航空教育隊跡地」の開拓・開墾が引揚者・戦災避難者・地元の農家によって行われた。いずれの開墾・開拓も困難を極めたが、その成功を記念して開拓碑が市内各所に残されている。

昭和29年（1954）9月に柏町・田中村・土村・小金町が合併し、「東葛市」が発足した。その後、小金町の大部分が松戸市に編入され、富勢村の半分が加わり、同年11月には県下17番目の「柏市」が誕生した。一方、昭和30年（1955）には旧沼南町の町域にあった手賀村と風早村が合併し、「沼南村」が誕生した。その後、昭和39年（1964）に沼南村の人口が約1万5,000人となり、「沼南町」となった。

軍郷都市からベッドタウンへ

昭和31年（1956）から造成工事が始まった荒工山・光ヶ丘団地は、日本住宅公団（現UR都市機構）が手がけた初期の小規模団地である。これをきっかけに公団は市域で多くの団地造成をはじめ、柏は「軍郷都市」から「ベッドタウン」へと変貌を遂げていく。昭和32年（1957）に光ヶ丘団地、昭和39年（1964）に豊四季台団地への入居が開始されるが、いずれも上下水道、道路、公園、小学校、商店など生活関連施設一式を組み込んだ、当時の新しい生活様式を取り入れた、いわゆる「夢の団地生活」である。その後、土地区画整理とともに、団地と戸建の宅地を供給するタイプの宅開団地と呼ばれる、大津ヶ丘団地（昭和53年（1978））、松葉町の北柏ライフタウン（昭和56年（1981））の入居が開始される。

近世に「小金牧」であった場所が、近代に「柏競馬場・柏ゴルフ場」として賑わい、戦時中には「軍需工場」の工員で溢れ、戦後に「豊四季台団地」として東京のベッドタウンとして機能した変遷は、柏の近現代史を象徴的に示していると言える。そして、日本住宅公団が供給した豊四季台団地は、UR都市機構による建替えが終了し、夢の「団地の時代」も終焉を迎えつつある。

スマートシティの先駆け

平成の時代に入り平成17年（2005）に柏市と沼南町が合併し、新生「柏市」が誕生した。時を同じくして、つくば



写真1-29：公・民・学の連携によるまちづくり

エクスプレスが開業すると、田中地区には「柏の葉キャンパス駅」「柏たなか駅」が誕生し、駅周辺では大規模区画整理が実施される。現在、東京大学、千葉大学、柏市、三井不動産、柏商工会議所、田中地域ふるさと協議会、柏の葉地域ふるさと協議会、首都圏新都市鉄道の8つの「構成団体」により共同で運営されるUDCKが、公・民・学連携で取り組むまちづくりが当地域で行われ、スマートシティの先駆けとなっている。



写真 1-30：柏レイソル (© KASHIWA REYSOL)

一方で、つくばエクスプレスが開通するまでは千葉県随一の乗降者数を誇った柏駅周辺は、かつて日本初のペDESTリアンデッキである「ダブルデッキ」や柏そごう最上階の回転展望レストラン（いずれも昭和48年（1973）完成）などが注目されたが、最近では柏そごうが閉店するなど地域の求心力を失いつつある。現在、柏アーバンデザインセンター（通称UDC2）は、公・民・学が三位一体となって柏駅周辺の課題解決型のまちづくりを行うべく活動を進めている。

千葉県北西部の陸上交通の要衝、商業拠点

市域は、JR常磐線、東武野田線、つくばエクスプレス、国道6号・16号、常磐自動車道が首都を中心に放射状、環状にめぐる道路網の結節点となる。近代以降は陸上交通の要衝として千葉県北西部の商業拠点、県内屈指の商業都市として発展してきた。近年は国道6号と国道16号が交差する呼塚交差点に程近い根戸工業団地（昭和44年（1969）工事完了）や柏インターチェンジに隣接する十余二工業団地（昭和46年（1971）竣工）において製造業を廃業した工場跡地に大型物流倉庫が建設され、柏インターチェンジに隣接して大規模区画整理が行われ大型物流倉庫の新設が予定されるなど、まさに時代を象徴している。

柏から世界へ！

昭和61年（1986）に柏レイソルの前身である日立製作所サッカー部が、東京都小平市から戦時中に日立製作所の軍需工場であった工場跡地に移転してくると、平成6年（1994）にJリーグ昇格を決めた。以降、柏を象徴する存在として「柏から世界へ」をスローガンに地域とともに活躍している。

日本一の汚濁湖沼からトリアスロン開催へ

昭和時代以降の急激な都市化のスピードに都市基盤の整備が追い付かない結果となり、大きな環境汚染を招くこととなった。都市化に伴い、大津川や大堀川に流された大量の生活排水や産業排水が手賀沼に流れ込み水質を悪化させた。かつての手賀沼は沼の底が透き通って見えるほど水が澄んでおり、昭和20年代前半までは水泳場も開かれていたほどであったが、環境庁（現在は省）の調査が始まった昭和49（1974）年度から平成12（2000）年度まで、27年間もの間、日本一汚濁した湖沼という不名誉な記録を続けた。

平成12年（2000）には北千葉導水路が完成し、利根川の水が浄化用水として本格的に導入されると、汚濁の目安となるCOD（化学的酸素要求量）の年平均値はピーク時の28mg/Lから8mg/L台へと改善した。手賀沼からアオコも悪臭も消え、地域の愛好者たちの夢であった「手賀沼トリアスロン大会」の開催が平成18年（2006）に実現され、現在に至る。

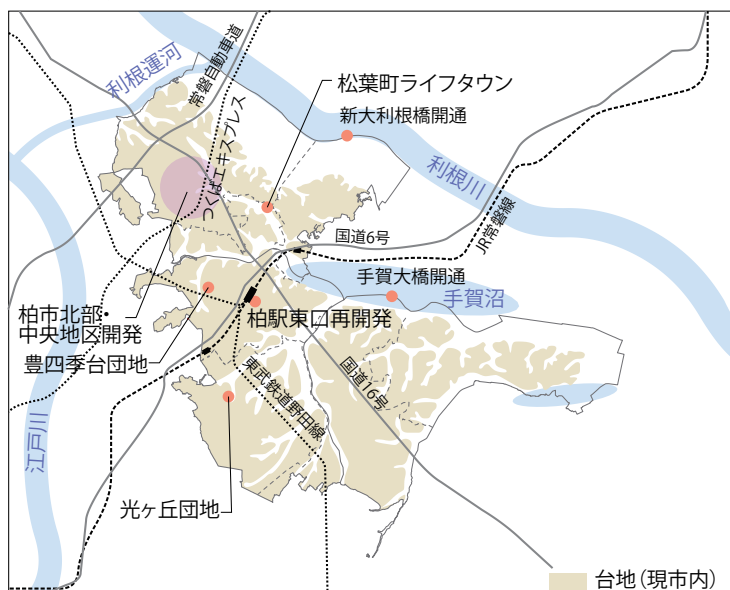


図 1-24：近現代